特103
328

佛教傳說叢書

第三卷

文覺上人

大正
3. 5. 12
内交

始

特103
328

佛教傳說叢書第三卷

文覺上人

目次

第一回……袈裟御前の絶筆……一頁
第二回……渡邊の橋供養……一七頁
第三回……嵯峨野の悲劇……三一頁
第四回……鳥羽の戀塚……四六頁
第五回……那智の荒行……五六頁
第六回……法住寺殿の活劇……七二頁
第七回……流人文覺……八六頁

文覺上人 目次（終）

第八回……文覺上人と源頼朝……一〇三頁
第九回……平氏追討の院宣……一一六頁
第十回……神護寺の造營……一二三頁
第十一回……平氏餘孽の掃蕩……一三八頁
第十二回……上人と六代御前……一六三頁
第十三回……六代御前の助命……一七五頁
第十四回……上人の入寂……一八五頁

文覺上人

（佛教傳說叢書第三卷）

大富秀賢著

第壹回　袈裟御前の絶筆

數ふれば今より七百六十九年前、時は天養元年六月二十四日の眞夜半であつた。

今しがた頭髪を洗ひ理めた袈裟御前は机の前に端坐し、蘭燈搔き立つる手さへ震ひがちにて、瀧と落ち來る涙をはらひつゝ筆執りて書き始めたる一通の遺狀。

『去らぬだに女は罪深しと承り侍るに、憂身の故にあまたの人を失ぬべければ我身一つを失ひ候ひぬ、獨り殘留まり御坐て歎き思召ん事こそ痛はしく侍れ、何事も然るべき事と申しながら先立進らせぬる悲しさよ、相構へて後の夜よく吊らひて給らん、佛になり侍りなば母御前をも渡をも必ず迎へ奉るべし、よろづ細かに申度侍れども落つる涙に水茎の跡見え分らずとて

露ふかき淺茅が原に迷ふ身の
いとゞ暗路に入るぞ悲しき』

母御前、先立つ身の不孝くれ〳〵もゆるさせ給へや……

三界無安宅、生老病死の假の身、一切の行はみな無常にこそ、無常の虎の聲は明々暮々に耳に近づけども世路のはしりに聞へず、雪山の鳥の聲は日々夜々

に今日死を知らずと鳴けども栖を出でゝ遠かに忘る、冥途の使身に競ひ、屠所の羊の足早にして親に先つ子、妻に別るゝ良人、形は芭蕉の風に破らるゝが如く、命は水の泡波に隨ひて消ゆ。

袈裟御前は手函の中へ納めつゝ又も太息つぎて暫し歎きに暮るゝのであつた

殺されぬとて限りある世なれば一人生きのぶべくもあらず、親を思ひ、子を悲む心は獸すら猶ふかしと申す、まして人界の類ひ、何時まで母御前を煩はし得べきぞ、今ぞ死すべき期の來りつるなり、何條殘りをしく思ふべきや、されど幼きより育み給ひ、わが身一つを便りとし給ふ母御前の亡からん後は如何に悲み給ふらんと、來し方行末のこと一時に浮み出で胸の白糸しどろに亂れ、滂沱たる涙は瀧のやうに落つるのであつた。

折しも暗を破る衞士の告知、四隣聲なく夜もすでに三更に及んだ、屹として襟を正し西に向ふた袈裟御前は合掌して伏し拜み〳〵、

南無西方極樂教主阿彌陀如來、願くば引接し給へ、南無阿彌陀佛、々々々々々……、

母御前、これにて御別れ申すべし、先立つ身の不孝ゆるさせ給へと、北に向ひて平伏しになり、そのまゝ床の中へと這入つた。

折しもしまりなき庭の妻戸を押し開き、氷の如き三尺の秋水片手に提げ、拔き足さし足忍び入つたる曲者あり、是なん北面の武士遠藤武者盛遠にて、椽に上つて耳すまし暫し樣子を窺ひしが、時分やよしと思ひけん、帳臺の前に探り寄り、ためつすかしつ、頭髮洗ふたる者の烏帽子を置いて臥す者を見てニット

笑み太刀振り上げて懸聲諸共寢首を討ちそのまゝ元の暗にと消へ失せた。

翌朝盛遠の郎黨共慌しく馳せ參じ

『物申さん、昨夜何者の所爲にや候はん、渡左衞門殿の女房の御首を切り參らせ侍る程に、左衞門殿は箇程の大事を知らざりしは口惜しさことなりとて臥し沈み給ふと、吊ひに御渡り候へ』

何と申す、渡左衞門にてはなく女房が首を切り取られしと、無南三寶失敗つたり、さては女房が良人の身代りとなりしかと、首取り出してよく〳〵見れば擬ふかたなき我が戀人袈裟御前の首であつた。

流石强剛不敵の遠藤盛遠も、件の首を一と目見るより力なくも伏し倒れ、一夜の泥も遂けもせず、三年の戀は唯一場の夢なりしかと、後悔の涙にかきくれ

て悔恨の情禁じ難く、身の置き所もなく悲んだ。

『噫、過てり、過てり、諸法はこれ無常ぞ、生ある者は必ず死すればこそ三世の諸佛も炎の煙を示し給ふらめ、會ふことあつて別るればこそ上界の天人も退没の雲には悲むらめ、況や下界をや、凡夫をや、夫婦の契り前後の怨み世の習ひなり、人の癖なり、これぞ然るべき善知識なり、歎くべきにあらず、あかぬ別れの妻故にこそ道心を發すためしは多かりけれ、これ三寶の御利生に外ならず」

今までは青春の血燃ゑ立ち、戀の擒になつて居た盛遠も翻然迷ひの夢から覺めた、これが人として誠に尊ひ所である、宗教心と云ふものは誰にでも具つてあるものであるが、人の心の琴線に觸れねば發現し難いものである、一度びこの

心絃に觸れ來ると人の深奥に潜んである宗教心は忽ち發動し來るものである。

世には一跌、再跌、失望に失望を重ね、世を誹り、他を嫉み煩悶に煩悶を重ねあらゆる罪惡の中に浮沈しながらも何等懺悔の念なく、徒らに單調無趣味なる生活に甘んじて居るものもあるが、一度び苦惱の極點に達して懊惱絶望の淵に臨みたる時に於ては、爰に初めて自己の本心の賴む可らざることを自覺すると共に絶對の慈光に觸れ春風駘蕩たる恩寵の生活に入り信仰の光りに接することを得るのである。

孝貞兩道を全ふせんとして一身を犧牲にした袈裟御前の死は遠藤武者が深奥に潜んで居る宗教心を發現せしむべき琴線となつたのである、されば袈裟御前は啻に孝女節婦のみならず、茲に一人の豪僧文覺上人を產み出だしたものと云

はねばならぬ、或一部の人々は袈裟御前の性行に付ては是非を云爲する人もあれど、此等の歴史的研究は別として彼が在來から賢婦淑女の龜鑑として認められて來たことは一點の非難すべき處ろなく淑女才媛の深く欽慕すべき事であろうと思はる。古來から貞女の龜鑑と崇めらるゝ靜御前又は大磯の虎でもその徑路には多少の異曲はあるが貞節を全ふしたと云ふその揆はみな一つである。

靜御前が賴朝の面前にて

吉野山みねの白雪ふみわけて
入りにし人のあとぞ戀しき

しづやしづしづの小田卷繰返し
昔を今になす由もかな

と謠ひて義經を慕ふの纏綿たる情調の微かなるを述べ、終生貞節を全ふしたるが如き、大磯の虎の身は賤しき遊女にありながら相思の十郎が沒後十九歳にして翡翠の髮を落して尼となり一生冥福を祈りたるが如きみな貞女の龜鑑として稱うべきものである、袈裟御前の如きはその中に於て最もすぐれて美はしきものである。

深き戀の迷ひから覺めた盛遠は、袈裟御前の首を前に置き、慚愧の涙止め難く

『さては汝は孝道貞節を全ふじ、吾が邪惡を翻させんとて良人の身代りとなりつるよ、かくも貞女の汝と知らず無理非道を言ひかけし盛遠こそ大惡人なれ非と知つて非をさとらざるは丈夫にあらず、イザ天晴れ汝の仇をとらさすべし、この身の難題ゆるし呉れよ』

と、首級を布にて大切に包み郎黨一人召し具して渡が住家へ行つたが、常になく門戸は閉されて音もせぬ。郎黨は門を叩いてこの由を告げた、渡は門を開かうともせず内から應へて言ふ

『御渡りの段殊によろこばしく存じ候、但し面目もなきこと出來仕り、向後は人々に見參せざらんやう發願せり、折角ながら御歸館あるやう願はしく候』

渡の覺悟は仲々の殊勝である。盛遠は聲を勵まして、

『女房の御首を切り候奴をきゝ出して搦め捕りて參りつる程に、斯くも遲參仕り候、急ぎ門を開き給へ』

渡はこの一言に驚きつゝ、愁歎の中にも幾分の慰みを得、急ぎ門を開かしめた。渡は盛遠の入るを遲しと椽先に迎出で、忿怒にあまる面は朱の如く、毛髮逆か

に立ち太刀の柄を確乎と握り

『シテ女房の仇は何處にあるや、疾く〳〵』

盛遠は徐ろに上り

『左程急かるゝは道理なれども萬事は袈裟殿の亡き骸の邊りにて申上ぐべし』

と、奥に通れば今しも母、衣川は首搔かれたる袈裟御前の亡き骸にすがりつき泣き崩れて居るさま見るさへ悲慘の極みである。盛遠は包みの中から首取り出し亡き骸に合せば、母、衣川はそを引き抱き、右につゝみ、左に受け、顏にすりあて膝に懷き

『コレ娘よ、汝は何故ありてかゝる淺間しい最後を遂げしぞ、何者に打たれたるぞ、何故言はぬか、コレ娘、今一度母御前とよんで呉れ、コレ娘や、娘や

盛遠死を決して罪を謝す

――――』

母の衣川は半ば狂氣の如く歎き悲む斗りであつた、噫、何と云ふ悲慘であろう

盛遠はドッカと腰下ろしたるまゝ腰の太刀を渡の前へ投げ出して徐ろに語り出した。

『渡殿免し召され、姨母君堪忍せられよ、その敵と申すは斯く言ふこの盛遠にこそ、袈裟殿の首掻き落せしは某の所爲なり、某はからずも袈裟殿を見染め參らせてより深き戀路に陷り煩惱の犬は追へども去らず、袈裟殿に無理非道を言ひかけしに、孝道貞節にあつき袈裟殿は貴殿に代つて一命落しての言ひ譯、且つは某の邪惡を翻させん爲めの計略、某慚愧に堪へず、自害せんとは思ひしかど、同じゝは御邊の手にかゝつて死なんこそ本意なり、イザ女房の仇相具したり、袈裟殿の敵にこそ、疾く々々切りすて召され』

と、語り終つて盛遠は渡の前へいと神妙に首さし出した。

この物語を聞いた母の衣川は盛遠の袖にしがみつき、

『さて〳〵娘の仇は外ならぬ貴殿にてありしか、コレ盛遠殿、何故このやうなむごたらしいことをしてくれたぞ、サア盛遠殿娘を元のやうにして返し給はれ、活かして返せ、餘りと云へばあまりの仕打ちぞ、、、、』

女房の仇と聞いた渡左衞門尉は滿面朱を帶び、その態阿修羅の如く、柄も折れよと太刀握り

『女房の敵、思ゐば憎つくき奴、何條其方等の汚れ刀を借るべきぞ、イザ立ち上つて尋常に我が恨みの刃を受けよ』

渡は早や太刀引き拔いて仁王立ちにて待ち構へて居る、盛遠は惡びれたるさまも無く座したるまゝ首さしのべて

『今は何とて貴殿に及向ひすべきや、袈裟殿の敵早く打ち召されよ』

この時此の一刹那、端なくも一道の光明は渡の胸に閃き渡つた、妻はこれ現に孝に死し貞に死し、盛遠亦前非を悔いて尋常に首さし伸べて及の下に座せり、かれを打たりとて何にかせん、却つて妻が苦患を增すばかり、如かずこれを發心の逆緣として永く菩提の道に入らんにはと、瞬間に宿善の光輝が强く胸を射透うしたのであつた

覺悟の臍を堅めた盛遠は殊勝げに首さし伸べて靜かに念佛唱ゑながら今か〳〵と待ち受けて居る、太刀振り上げた渡はそのまゝドッカと座り込み

『討つまじ〳〵、討つて益なし、自害せらるゝにも及ばず、生は難く死は易しとかや、今死したりとて何の詮もある可らず、女房こそ然るべき善知識にこそ、觀音菩薩の假りに女身に現じてわれ等に道心發させんとし給ふ方便に外ならず、されば今生の我執に來生の苦患を招かんこと自他互ひに由なきことなり、只御邊も某も出家して亡き人の菩提を弔ひ一佛淨土の往生こそ願はしけれ』

見る間に渡の髻は根元からブッツリ切り落された、盛遠はあまりのことに咽び返つて聲も出ぬ、三度、五度、七たび渡を伏し拜み、これも忽ちに髻切うすてた

流轉三界中　恩愛不能斷

棄恩入無爲　眞實報恩謝

昨は非なり、今は是なり、戀の敵は此に菩提の朋となり、渡は渡阿彌、盛遠は盛阿彌と名乘り共にひとしく法の道に入つた、是も權化のなしわざであろうこの盛阿彌こそ後年の豪僧文覺上人其人である、文覺上人の出でたる時代こそ我が歷史上に趣味の深い、平氏の滅亡、源家の勃興を背景としての舞臺であるから、只さる凡人ならぬ上人の豪壯な、而ふして痛快な宗敎的活動は實に目覺しきものがあつた、潔齋精進、勤苦刻勵、縱橫に佛法の利刄を揮ひ、高貴となく、卑賤となく、心のゆくまゝに自行化他の大道を濶步したのである、己下回を重ねて上人半面の傳說を描き出さう

第二回　渡邊の橋供養

豪僧文覺上人の俗姓は遠藤盛遠と言ふて北面の武士で渡邊黨の一人、左近將監盛光の一子である。盛光は素より文武兩道に長け院の御覺へも殊に目出度く何不自由ない身であつたが、今茲六十の阪を超へたれど夫妻の中には一人の子供もなかつた。壯年の時には左程でもなかつたが寄る年波につれて實子のないのが此上なく淋しき思ひがする、人としては誠にさもあるべきであろう。

私の同窓で十年近くも小菅監獄で死刑囚人の敎誨師を勤めて居た沼波政憲君は多年の經驗上こう云ふことを云ふて居つた。それは刑場の露と消へる彼等囚人の中には、刑臺へ上つてからか又はその前に勵聲一番歌を唄つたり、詩を吟

じたり、辭世やうのものを作つたりする者もあるが、それが盡く子供を持たぬ者に限つて居るやうである、實子を持つた者は殆んどかゝる傾向がないやうである、これから類推すると實子のある者はタトヒ自分が今刑場の露と消ゆるとも後には第二の我があると云ふので此に心中言ふ可らざる慰安を得るのであろうが、實子のない者はこの慰安を得ることが出來ぬから自然臨終の虚名を流すのであろう、これを自分は死の虚榮と名づけて居るが、實子のあるのとないは人間の精神作用上に甚大の關係がある云々と言はれたが事實そうであろうと信ぜられる

今、盛光夫妻も毎に之れを歎いて居つたが遂に日頃信仰する長谷寺の觀音へ夫妻が一七日の參籠を企て一子を授け給へと祈請を凝らすに至つた。昔しは神

佛に祈請して一子御授けを願ふと云ふことが隨分あつたものである。源信僧都でも、法然上人でも、或は勝尾寺の性空上人、中將姫、熊谷蓮生坊などみんな揃いも揃ふて申し子である、どうも申し子の方々はみな世間にあらはれて居られる所から見れば尋常の凡人ではないやうに思はれる、神佛の加被力と云ふ事は決して荒唐の說では無いのである。

盛光夫妻が一七日參籠の功は空しからず、滿願の曉に大悲觀音の御手から鳶の羽一枚賜つたるを左の袖で御受けをした靈夢を感じた。妻はその月から妊娠の身になり夫妻が信仰の度はいよ〳〵高まつた。

一災去つて又一災、一喜一憂と云ふことは人生どうも免れ難い事と見ゆる。古から慶者堂にあり吊者門に臨むと云ふが、妻は十月滿ちて玉のやうな男子

を産み落すと共に最早この世の人ではなかつた。それもその筈である、四十三歳の初産で生理の上から推しても無理もないことである。盛光は悲喜の涙を押へて漸く葬儀も濟ましたが、嬰兒は空腹を訴へて頻りに泣き叫ぶ。乳母を探し求めて來たがまだ乳育が充分でなかつた。

此に丹波國保津庄に春木道善と云ふ者がある、以前は盛光方へ主從のやうに出入りして居つた者であるが、盛光はフト此事を思ひ出しこの道善へ里子に遣はすやうにした、この道善夫妻は世にも稀な慈愛深く、實子も及ばぬ程大切に育て上げたが、恰度三才になつた春、盛光も妻の後を追ふてあの世の人となつた。

生みの父母に離れ今は全く孤兒となつたが道善夫妻が厚き情けの下に日々に生長して行つた。呼び名を一童丸と名づけられたが、あまり額の黑かつたので誰云ふとなく黑童丸〳〵と異名をつけるやうになつた、六七才の頃から椀白小僧の連に入り餓鬼大將となり、山野となく田畑となく荒れ廻り、性質は飽までだと云ふことである。

上人の幼時

斯くて春去り夏來り一童丸は十三の春を迎へたが力飽まで強く丈高く天晴れの丈夫となつた。そこで道善は都へ伴れ上り一門の遠藤三郎遠光の烏帽子親として元服せしめ、父遠光の一字と、烏帽子親の一字をとりて遠藤武者盛遠と稱し父の職を襲いで上西門院の北面の武士となつた。元より非凡な性なれば日ならずして武藝も進み經學にも熟達し天晴望みある武士よと、內外より望みを囑

上人元服して北面の武士となる

渡邊の橋供養と上人の奉行役

せられた。住居は渡邊渡と同じ鳥羽の里であつた。斯く言へば如何にも武骨一邊のやうではあるが、時には鳥羽の里に梵唄の靜かな響きが朝霧を破ることがあつた、それは亡き父母が菩提の爲めに千手經を讀誦するのであつた。

今日は元養元年三月十二日、攝州渡邊橋の渡り初めの橋供養である。この渡邊橋は浪花、大江の岸にかゝり實に二百六十六間の長橋で畿内第一と稱せられた。頃は暑つからず寒からず空は拭ふが如く澄み渡りたる日本晴れ、今日の盛大な橋供養に會はんものと、老若男女は潮の如く詰めかけた。この混雜を警固の爲めとて禁裏から遠藤武者盛遠にその日の奉行役を仰せつけられた

この時、盛遠は十八歳であつたが、筋骨いやが上にも逞しきに、紺紫の直垂に黑糸縅しの腹卷、折烏帽子を着、銀の蛭卷二筋通して卷きたる長刀を、左

上人袈裟御前を嘉ふ

の脇に挾み辻々を固めたる雜人原を嚴そかに下知し橋の上に立ちたる姿こそ如何にも凜々しかつた。

流石盛大な橋供養も魔事なく了り、拜觀の群集はわれ一にとどよめき家路を急いだが、この時盛遠は見るともなく橋の北詰を眺めたるに棧敷の中から今し方迎へに來たる輿に乘らんとて下り來る十六七ばかりの一美人、丹花の唇愛くろしく、青黛の眉新月の如く、綠の黑髮、雪の肌、吹く川風に裙返されじと小袿を摘みたる、纖き手、迎への者にニッと笑みたる笑靨に滿顏の愛を湛ゑたる風情、これぞ楊黃妃が再來か、毛嬙西施も斯くまで美はしからじ、眞に絶世の美人、女房を帶つならばとても斯る女こそ望ましけれと、流石の盛遠も戀の擒となり、煩惱の犬は追へども去らず、今は重き役柄さへ忘れ果て、誰人の娘な

るか見屆けんものと、件の輿に尾行して女の後を追ひ行きしに思ひもよらぬ鳥羽の里渡邊左衞門尉渡が門へ入つた。さては同役渡邊が女房でわが姨母の娘、袈裟御前であつたかと再び驚いた。

一と度戀の暗路に踏み迷ひたる盛遠は晴らさんとすれど晴れず、覺んとすれど覺めず、迷宮は迷宮を生み、煩惱は煩惱を生じ仇戀の爲めに煩惱すること百日にも及んだ。最も怖るべきは戀愛である。世に戀愛ほど恐るべきものはない多くの青年男女が一朝にして世を誤り身を亡ぼすもの多くは此の魔風の誘惑である戀は實に人生の苦痛である

現に淺草十二階の下には倫落せる三千の白首が居る、これ等は家庭の爲めとか義理に迫つてとかの止むを得ざる事情の爲めに身を落した者は至極僅少でその大部分は皆自分から墮落した結果であると云ふことである、洵に人生凄慘の極みである。

かつて私は無料宿泊所などで聞き合はして見たことがあるが、此所等へ泊りに來る者は眞にあはれむべき細民ばかりぢやと思ふて居たらやはり戀の擒となりて墮落した者が多いと云ふことである。恐れて怖るべきは戀である。古から一世を壓するやうな英雄豪傑が後世までの誹りを胎したり或は終りを全ふせぬのも悉くこの戀の爲めである。されば書寫の證空上人は和泉式部の到れるをみて大蛇が來たと看破したではないか。寶積經には

一見於女人　能失眼功德
縱雖見大蛇　不可見女人

上人と袈裟御前の關係

衣川の素性

と、誡められた。

盛遠武者が見染めて戀に悶へた袈裟御前は姨母の娘で盛遠とは水入らずの從兄妹で幼少の時には許嫁までしてあつた仲である。けれど盛遠は都の魔風にも染まぬ武骨一邊で今日までは婦人に對する觀念は殊に薄く、綾羅錦繡を着かざる都美人も盛遠の前には一瞥の價なく、隨つて許嫁の間柄であつた袈裟御前に對しても冷々淡々として水より淡くあつた。かゝる間に母の衣川は昔日の約に背き媒酌のあるにまかせて渡方へ嫁つかしたのであつた。

此でこの衣川の素性を述べ置く事も必要であらう。この人は盛遠の父盛光の異母妹で年頃に至つて某家に嫁いたが良人と共に奥州衣川へ下つて住居して居つたで世間からは住居の地名によつて衣川と唱へられて居たのであつた。夫妻

袈裟御前の結婚

の間に一人の娘があつてハヽアトヽと言ふたが世の中は何時も順調でなく、樂しい月日を送つて居たのは束の間で衣川の良人はフトしたことが原因となつて歸らぬ旅路の人となつた。心面白からぬ浮世と觀ずると共に都の空なつかしさに堪へず二才のハヽアトヽを伴ふて都へ舞ひ戻つて來た。

この時盛遠は三才で父盛光は未だこの世にあつたが一つ違ひの從兄妹同士と云ふので兩人は行末夫婦にすべしと、盛光と衣川との間に堅く約せられた。ハヽアトヽは生長するに隨ひて容色共に人にすぐれ、女の伎藝としては何恥しからぬまでに習得し、軒端の梅の香しく、前栽の花細かなる深窓の内に早や十四の春を迎へた。衣川の娘なれば世間からは袈裟御前と呼ばれて居た。

絶世の美人で、万につけ愛嬌があつて、氣質が温和で、女らしい女と云ふの

で諸方より婚約を申し込むものの引きもきらず、中には隨分釣り合はぬやうな權貴名門などからも話しがあつたが、母の衣川は流石世馴れたる人だけで釣り合ひの取れぬ縁は不縁の種、破鏡の元ぢやと云ふて渡の性質の温和な親切なのが心に適ひ、娘が苦樂をまかす聟料はこの人ぞと渡方へ遣はしたのであつた。階老同穴の契りもむつまじく、新婚の夢濃かに早くも三年の月日を送つた。

盛遠は袈裟御前とは許嫁の間柄であること、近頃渡方へ嫁ついたことを知らぬではなけれど、元より武骨一邊でその上袈裟御前の姿さへ見たこともないと云ふ程なれば今日までは餘所吹く風ときゝ流し別段氣にも止めぬのであつたが橋供養の日に見染めたのがそも〳〵の逆縁となつたのである。

この逆縁と云ふことは世間によくあることで殊に佛敎では盛んに談ずる。彼

の天竺の頻婆沙羅王がわが子の阿闍世太子の爲めに七重の牢獄に幽閉せられたこの時韋提希夫人は種々の手段を施して王に食を供した、この秘密を知つた阿闍世太子は大に怒りて母はわが仇に與みす、母もこれわが賊なりと同じく牢獄の中へ閉ぢ込めてしまつた。これまで韋提希夫人は娑婆は結搆な所である、わが子は便りになるものと信じて居つたに、かゝる憂悴をみるとはさて〳〵便りにならぬは娑婆の世界である、賴みにならぬはわが子であると心機一轉し、愁憂憔悴せる韋提希夫人は牢獄からはるか世尊に念じた

世尊よ、世尊は威重にして見奉るを得ざるも願くば目連尊者と阿難尊者を遣はしめ給へと一心に祈念を凝らした。世尊は遙か夫人の心中を知ろしめし卽ち王宮に降臨しまし〳〵た。夫人は驚きながら、世尊よこの娑婆は濁惡世にて地

獄、餓鬼、畜生、盈滿し不善の聚多し、願くば吾未來に於ては惡人を見ず、惡聲を聞かざる所を欲すと、五體を地に投じて世尊に請ふたのが原因となつて淨土の觀無量壽經を說き給ふた。これ大なる逆緣ではないか。その外、聖德太子の守屋に於ける、親鸞聖人の越後へ流罪の如きみな逆緣である。

今、盛遠も一と目袈裟御前を見染めたが逆緣となり、彼と某とは豫てよりの許嫁なるにもかゝはらず、何程疎遠に打過ぎればとて一應の挨拶もなしに人もあるべき同じ渡邊黨の者へ遣はすとは如何にも踏附たる仕方、憎つくき衣川、餘りと云へば面憎い衣川、イザ目に物見せてくれんと滿面に怒氣を帶び急ぎ嵯峨野なる衣川の詫住居へと赴いた。

女身を以て佛道を成ずることを得べからず。所以はいかん、女に三事の礙りあり。何をか三と謂ふ、少ふして父母に制せられ、出嫁して夫に制せられ自由が得ず、長大にして子に離ぜらる是を三と爲す。（超日月經）

上人衣川を襲ふ

第三回　嵯峨野の悲劇

便りに思ふ一人娘を緣づかしてから衣川は嵯峨野の奥の詫住居、しみ〴〵身に泌む淋しさ、白鳥の鳥羽田の面の秋の夕暮、軒端の萩の風ならで誰音づる人もなく、短かき夏の一夜さへ八聲の鳥を待ちかねて起き上つた。

衣川は今、朝餉を了つて庭の草葉にをく露をながむともなく打ち眺め、何思ひけんホロリと落す熱涙一點、袈裟の身の上でも思ひ出して居るのであろう。

不意に案内もなしに踏み込んだ一人の武士、身の丈け七尺にも餘る鐵面牛皮の大男、衣川目がけて太刀引き拔いて打つてかゝつた。夢かとばかりに驚いた衣川は口も頓かにきけず、諸手を翳して足もしどろもどろ。

『オ、見ればそなたは甥の盛遠ぬしではないか、何意趣あつてこの體たらく、マ、暫く、暫く、氣を沈められよ、この姨母の一生の願ひぢや、マ、暫く〳〵……』

盛遠は不承無性に太刀を納めた。

『盛遠ぬし、よく聞かれよ、そも和殿はわが爲めには甥、和殿の爲めには姨母姨母甥の間でありながらかゝる仰々しき振舞せらるゝ怨みはよもあるまじ、殊に和殿の母の死なれし後は便りなき孤子なればこの姨母は和殿を孫とも子ともいとほしく思ひ、和殿も亦父とも母とも憑み慕はれしに、このやうな人らしきもなき振舞は定めて他人の讒言に由らん、身にはさら〳〵覺へ申さず暫く氣を沈めて恨みのまゝを述べられよ、心のゆくまゝに必ず晴し申さん』

語り了つて衣川は疊の上へ打ち仆れ、よゝとばかりに泣き伏した。

盛遠は兩肱張つて、ハツタと衣川を瞋みつけてさも苦々しく、

「姨母なりとも叔父なりとも我を殺さんとし給ふ敵なればよも遁れまじ、われ等渡邊黨の習ひとして一旦期くと思ひ込んだることは通さずば置かじ、くだらぬ言ひ譯け無用で御座る、姨母上覺悟召され、只今さし殺し申さん」

又もや盛遠は太刀の柄に手をかけた。衣川は心も心ならず、打震ひながら涙を拂ひ、

『妾は良人にはなれて寡婦となるも、和殿に於てかゝる仰々しきことしかけらるゝ意趣更になし、さるを敵となるべき恨みのあるなどゝは誰人の申し侍るにや、事細かに申しきかされよ』

盛遠は百雷の一時に響くやうな聲で、
『吏々他人の申すのでは御座らぬ、斯く云ふ盛遠の申す事なり、袈裟殿と某とは許嫁の間では御座らぬか、さるをどう云ふ事情かは知らぬが渡が許へ遣はつしやつたで、この三年は他人知れず戀に迷ふて身は蟬の脱の如く、命は草葉の露と共に消ゆる思ひ、これぞ姨母の甥を殺すと言ふものぢや、されば生き伸びて物を煩ふも苦しければ敵と一所に死なんと思ふ所存、どうぢやかう申せば愚かな姨母でも合點が參るであろう、さあ尋常に甥の手に掛つて成佛召されい』
衣川はやうやく甥の意中を察することが出來た。何とか遁辭を設けて急場の危難を免れんものと早くも決心し、

衣川窮地に陷る

『方々申す中にもかくと仄かに世評にて承りしもさまでとは思はざりしことの口惜しく侍る、身の榮へぬまゝに何方へなりともと存ぜしに、奪ふ如く渡方へ引き取りしかば是非もなかりし、左程までに思ひ給はゞいと心安きことなり姨母の胸にも所存あり、先づその太刀を納められよ、今宵は呼び戻して和殿に會はし申さん』
流石に盛遠も此の詞をきゝ今までの瞋りは何方ともなく消へ失せ、急いで太刀を納め、
『姨母上、思はぬ難題持ちかけ無禮雜言の段ゆるし召され、かくも親切な御言をきく上は盛遠嬉しさにたへず、さらば今宵五つを期して參るべければ確かとその手筈をせられたし、姨母上、これにて御いとま仕らん』

衣川袈裟御前を招く

御免〳〵々々の聲を殘して北瘦笑んで盛遠は歸つて行つた

盛遠の姿の遠くなるまで打見やり居たる衣川はドットばかりに泣き崩れたが餘りの悲しさに聲も出ぬ。ろうたけき一人娘の袈裟の前、何卒行末は幸あれかしと朝夕祈りし甲斐もなく、無理非道な盛遠の難題、この世には神も佛けも在まさぬものか、亡き良人のましまさば斯かる憂き目を見まじきに、獨り身の口惜しさよ。

さりとて現在娘の袈裟の前に不貞をせよと、親の口から何とてすゝめられよう、さなくば盛遠の爲めに一命とらるゝは火を睹るよりも明かなこと、不貞をすゝむか、一命奪はるゝか二つに一つ、同じ一命すつるなら盛遠が刀の錆となるよりは娘の手にかゝればこの身の本望と、咄嗟の間に決心した衣川は、料紙

引き寄せ文かきしるして袈裟御前へ遣はした。袈裟御前は思ひもよらぬ母よりの使者、何事ぞと取る手も遲しと文函を開きみれば、

この程風の心地候、打臥すまでのことはなし、披露まではこと〳〵しく候、忍んでをはしませ、申し合すべきこと侍るなり、寡なる身にははかなきことのみ、かへす〳〵忍びて只一人にてをはしませ、かしく。

この母からの消息を讀み了つた袈裟御前は、一方ならず胸打ちさはぎ、不在の良人へは細々と言ひ殘し置き女童一人召し具して急ぎ母の許へ歸つて來た。

娘を一間に請じた衣川は物をも言はずに只潸然と泣き崩れて居るばかり、袈裟御前はいぶかしさに堪へかね

『母御前如何し給ひつるぞ、さ程に泣き崩れ給ふは何故にや、具さにはなし給

へ』

袈裟御前は母の膝に手を置きその横顔をさし覗いた。ット起つた衣川は手函の中から懐剣取り出して娘の前に置き

『この母はとく覺悟せり、イザこれにて一思ひにわれを刺し殺し給へ……。』

又もよゝとばかりに泣き崩れた。この有様に袈裟御前も只打ち驚くばかり。

『母御前、こは何事に候ふぞ、物狂ひし給ひしか、さなくば様子もをはさん、早くはなし給へ、のう母御前。』

袈裟御前の頰には早や熱い涙が瀧のやうにつたうて居る。

『露ばかりも物狂ひせしに非ず、物狂ひせしは蜘の盛遠にこそ、今朝早々盛遠はこの母に迫まり太刀振りかざして和殿に道ならぬ戀の難題、若し盛遠の思

ひ遂げずばこの母は殺さるゝこと必定、さればとて盛遠が思ひ通せば渡が心を破り不貞の汚名は免れず、所詮死すべきわが一命、盛遠が刀の錆になるよりは和御前の手にかゝれば身の本望、始終の様子はこれこの通り、これ袈裟の前、早や刺して給はれ、これ娘よ……。』

憧然片手に衣川は袈裟の前へニヂリ寄つた。始めて聞いた盛遠の難題、彼れ仲々の強情なれば易くは承け引かぬことは必定、母を手にかけて節操を立てんか節操を破つて母を救はんか。

貞婦たらんとすれば孝道全からず、孝道全ければ節操破る。不貞に了つて孝せんか、不孝に了つて義を立てんか……

流石に細き女心の心も心ならず暫しは途方に暮れけるが、生きてこの苦み

を見んよりは死して罪を謝するに如かずと、袈裟御前は咄嗟の間に石よりも堅き決心したのであつた。

『母御前、さほど悲み給ふな、親の命に代りなんためには身を汚し侍るとも何事か候ぞ、偽りを申すも口は穢れ侍れど心は汚れ候はじ、親の爲めならば傾城白拍子にもなりぬべし、母御前、心やすく思召せ、よく〳〵合點し給へ。』

口にはけなげに言ひ放つたが袈裟の衷心果して如何であつたであろう、推し計るも涙の種である。今日此頃の新らしい女などは口を開くと理想の家庭ぢやとか、舅姑は別居すべきものぢやなどゝ囃し立てゝ居るがさていよ〳〵實地家庭を造つて見ると何時も其理窟と齟齬するが世態の常であるがこう云ふ時には意志の薄弱な人は兎角倫落の渦底に流れ易いものである。その時こそ十重二十

重の悶へを慰藉し、無限の力添へをして下さるは大悲の御親ばかりである。佛陀の御慈悲を心の中で繰りかへし〳〵してみると絶對無限の法味は津々として盡きることなく煩悶の雲はれて霽風朗月、胸に一點の憂惱なく、今までは秘密に秘密を重ね、苦悶に苦悶を圍み來たのが宛然坦々たる大道に出でた如くなる

これ外ならず、如來の慈恩を浮ぶと共に人生因果の免れ難きを知るからである

若し袈裟御前にして宗教を知らず、世の因果を信ぜなかつたならば千歳の今日まで名を竹帛に垂れるような龜鑑になることは出來なかつたであろう。素より權化の人でもあろうが、咄嗟の間に一身を犧牲にする決心が出來たのは全く宗教の力であると言はねばならぬ。

日は全く暮れた。

裂裟御前僞る

程なく盛遠は約を覆んで來た。湯浴みして鬢をかき上げ髯の剃り後青々として何時に似ぬ色めいて居る。袈裟御前の姿を見るや氣も早や有頂天、今朝の樣子に比ぶればまるで鬼と佛の相違である。

金鐵のやうな堅い決心した袈裟御前は口にまかせて盛遠の機嫌を取り、渡を恨むさまして先づ盛遠の疑ひを晴らし、更に耳に口を寄せ、

『渡に相馴れしより三年に及べども何時も心ならぬことのみ侍るなり、御身には心も打解けて末賴もしく存ずるは前生からのよく〳〵の緣のあるならん、御身もさほどに淺からず思召さんには思ひ切りて渡を夜討ちにし給へ、さすれば世間晴れて身もまかさるべきなり、身が謀かまへ侍らむ。』

盛遠は盃片手に今は舌も廻りかぬるは、袈裟の饗應にしたゝか醉うた勢であろう。

『してその計略とは如何にかまへ給ふぞ。』

問ひ返す言葉はせきこんで居た。

明朝わが身は何事もなき體にて邸に歸り、酒宴を設けて渡を請じ、高殿にて髮洗はせ、酒を强いて臥せしめ前栽の妻戸を開き置けば御身は帳臺の前の濡れたる頭髮と、烏帽子とをしるしとして渡の首を討ち給へ、計略とはこれにこそ。』

盛遠は顏の相好を崩して悅び、

『斯程親切な御身と露知らざりしは某が無朝榜、心得たり〳〵、鍛ひに鍛ひしこの腕前、山が崩るとも仕損じは仕らぬ。』

『コーレ盛遠ぬし、聲が高う御座る。』

いよ〳〵翌朝となり盛遠は急いで邸へ歸り夜討ちの支度にかゝつた。

袈裟御前はかねて覺悟の胸の中、言ふに言はれぬ母の前、これが生別死別なるか、母御前これが御顏の拜みじまい、隨分御體を御大切にと、口では言はねど胸の中千萬無量の思ひにて伏し拜み〳〵、屠所の羊のそれならで鳥羽の里へと立ち歸つた。

塒に急ぐ烏の聲物淋しく、今日も暮れぬと入相の鐘は諸行無常と洛の內外に響き渡りぬ袈裟御前は母のいたつきの全快したる心祝ひと酒盛りを催し、渡が前後不覺に醉ふて臥したるを伏し拜み〳〵、頭髮を洗ひ理め高殿に至り、烏帽子引き寄せ此に孝道と貞節を全せんとして可惜花の蕾を散らしてしまつたのである。

けれど至誠と云ふものは貴とひものである。この小さな袈裟御前の胸の中に湧いた至誠は後年豪僧文覺上人を產み出したではないか。古哲曰く、誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なりと、誠實が人を感ぜしむる偉力は天下何物も之に敵することは出來ぬ。

仇し露の身の消へざる程に佛の敎へに疎からず、色深くして移ろふ夕べを知るを女とやいはん、名のみばかりのうき世の中何しに心の止まるべきと思取りて、よしあしの事に心の涙を寄することなかれ。　―（小野小町）―

第四回　鳥羽の戀塚

手函の中に納めてあつた袈裟御前の遺書は衣川の手に開かれた。言々句々血涙の滴るゝが如く母の衣川は流石斷腸の思ひであつたであろう。

かくあさましき最後を遂げくれしもみなこの母の心の行き屆かぬから、あゝこの母は世にも愚かであつた、愚痴であつた。愚痴な母を愚痴とも思はず、死ぬる今端の夕べまづ斯く慕ひくれしは何と云ふしほらしい娘であろう。

不意に盛遠の來りて妾を害せんとしける程に、甥に諸手をすりて命を助けよと死を厭ひしも榮へ行く娘の末を一日も永く見たい爲めに外ならず。娘に及物渡してイザこれにて殺し給へと差し迫つたりしは今更思へば無理な言葉なり、

娘が母御前は物狂ひし給ひしかと云ふたもげに最もな次第にこそ、無理をあつらへ、不義をすゝめたるが爲め斯く親の命に代りしか、コリヤ娘よ、袈裟の前よ、この母が手にかけたも同前、これ娘よ、子なればこそこの愚痴のあつらへを忍んでくれた、よくも親の命に代つてくれしぞ。

深淵の底、猛き火炎の中なりとも共に入らんと思ひしに、この態は何たることぞ。老いて甲斐なき露の身を葎の宿に留め置き、如何にせよとて殘せしか、昨日を限りと知りたらば飽まで見ざるべきに、なぜ母娘もろとも同じ道にと誘はざりしかと、泣いて呼んでみても歸らぬ死出の旅かけて、應ふる音は谷吹く松風のみ、母は泣々筆執りて遺書の奥に、

闇路にも共に迷はで逢生に

衣川の落飾

衣川の往生

ひとり露けき身を如何にせん

と、書き添へてその塲で落飾して尼僧となり、その後は毎に天王寺に參籠し、早く淨土へ引接し、亡き娘と一蓮花の上で再會せしめ給へと一心に稱名念佛して居つたが、この思ひの徹りしにや、翌久安元年十月八日四十五歳を一期として眠るが如く娘の後を慕ひ目出たく往生の素懷を遂けたとのことである。

さても袈裟御前の亡き骸は、盛阿彌の文覺上人と渡阿彌と力を協せて之れを鳥羽へ葬り、塚を築き、法然上人を請じて高さ一丈の石に六字名號を書き給へるを立て、戀塚と名づけいとも懇ろに供養した。

その後文覺上人は高雄の神護寺再興の事終り未だ少々の餘材があつたから之れを鳥羽の地に運ばせ、足らざるはこの地にて補ひ戀塚の地境に一宇を建立し

戀塚を建つ

戀塚寺と文覺上人

て戀塚寺と稱し給ふた。この時、上人が昵近の弟子相照は審しく思ひ上人に向ふて

『師よ、今や高雄の舊寺再興の大願は天下に披露ありて或時は難にも値ひ給ひ又或時は十方の信施を受けしめ、その上武衞の御寄附等に由つて成就し給へば御滿足なり、然るに又この戀塚寺を建て給ふは昔の御愛着の猶去り給はざるにやと口惡き者の申し囃さんも口惜しく侍るが御意底の程こそ承りたし』

その時上人はやをら咳一咳して、

『如何に他人が囃し立つればとて聞くにも及ばねば返答するにも及はねども、斯く汝の問ふならば答ふべし

そも〳〵予始め袈裟御前を見てよりは愛執の犬は迫へども去らず、姨母衣川

を却がし衣川の泣き叫ぶ涙を見ても猶煩惱の火炎は消へ失せず、遂に逆罪を犯すに至れり、袈裟御前はわが愛執の爲め予を欺きて遂に一命を捨つ、されば予女に欺かれて何の喜びやあらん、世は廣しと雖欺く女に猶愛執をつゞけ戀慕する男やあらん、されど予は袈裟御前の首を切り落すまでは確かに深き愛着の淵に沈めり、これ渡の首とのみ思ひし故なり、後にては渡が首にあらずして、彼が首と知りたる時、さては予袈裟御前に謀られたるかと、心機一たび轉ずると共に彼を愛着せし念は忽ちに晴れ覺めたり、

然るに今この戀塚寺を建つるについて別の名をも附せず斯く稱へるはこれ後來まで斯かる節義を貽し、貞節の尊きを知らしめたき所存に外ならず、世に出家を知識と仰ぎ菩提の心を生ずるは類ひ多けれどもかゝる五障の女人にして發菩提心の者たらしむるは殊に珍らし、されば袈裟御前こそわが爲めには無二の善知識なり、この善知識の爲めに一宇を建立するは卽ち報恩謝德の意なり、その恩を忘れずして報ずるなり、

凡そ節婦はこれ三世諸佛出身の寶藏なり、不義なる女は毒蛇なり惡龍なり、世には節ならぬ不義の者を尋常とこそ思ひつらめ、近江に筑摩祭りと云ふことあり、その祭りの習ひにその村の女共は今まで男に會ひたる數に等しき鍋を被りて祭日には社の前を渡るなり、その神の託宣には、わが山の滅せんとする時は鍋一ついたゞきたる女渡るべしとあれど、昔から一つの鍋をいたゞいたる女は一人もあらじと、

或年この村に住みし一人の男、女を幼少より育て上げてわが妻とせしに、こ

の祭りの渡りにわが妻こそは鍋一つなるべしと存ぜしに件の妻は九つの鍋を
いたゞきたり、男は見るより腹立たしく、矢庭に打ち殺さんとせしも流石に
祭りの渡りなれば差し控へその女の家に歸るを待ちて去らしめき、その夜男
の枕邊に神現じて、汝今より非を知るべきやと告げられしに、男曰く非を知
るにあらず往いて不淨ならぬ妻を求めんとすと、神は重ねて、女たるものに
して鍋の十や二十を被らざるはある可らず、さるにも汝が妻は賢女なりと告
げ給ふと思ふ程に靈夢より覺めにけり、その時件の男のつら〳〵案ずるに、
昨日の祭りにわが妻程被りし鍋の少かりしはなし、その他は姫御前とも云は
る女さへ二十三十の鍋を頂かざるはなし、噫これ女の習ひにこそと、去りし
女を又尋ね求めて元の如く愛したりとなん、蛇道より生れ出でゝ女の習ひに

て如何とも致し難し
今袈裟御前は女にも似もやらず母に孝にして良人に義に、孝道貞節の爲め遂
に予を欺きて一命を捨つ、これ類ひ少き賢女なれば世の多くの鍋を頂く女に
知らせその不義を正さん所存にて寺を建てその名を世にのこす、これ文覺が
志なり』
上人は最も慇懃に誨へられた。これに似通つたはなしが支那にもある。
彼の魯の國の秋胡子と云ふ人は恰當妻を娶つてから三日目に急かに官命が下
つて遠方へ行つた。その後三年を費して用事を了り故國へ戻つて來た
漸く古郷へ近づいた頃、秋胡子の妻が路傍の畑の中に桑を摘んで居るを見て
何う云ふことであつたか非常に秋胡子の情が亂れた、元より秋胡子は自分の妻

とは露知らず馬から下りて女の許に至り種々に言ひ寄つたが女は頑として聞き入れぬ、そこで秋胡子は荷嚢の中から黄金二十枚を出して女に贈りて挑みかけた、けれども女は聞き入れぬ、妾は良人のある身の上なり何ぞてかゝる無禮をし給へつるかと叱したが秋胡子猶戯れて止まぬ、此に於て女は嚴然として、御身は妾の申すことを僞りと思召すか、妾には秋胡子と云ふ良人あり、妾が嫁いでより三日目にして急かの官命により他國へ旅行せられ今日に及んで三年になるも一日として良人を偲はざる日なく、一度として他人の辱めを受けしことなし、一旦良人と許せし人のある身なれば何として二夫に見ゆるを得べきやと、眞顏になつて瞋つた。秋胡子は初めてわが妻なりしを知り大に慙ぢたが、その後秋胡子は自分の非を悔ゆると共に妻の貞節を賞して止まなかつたと云ふこと

である。

袈裟御前と秋胡子の妻、素より事實は違ふけれど貞節の揆は同一である。彼のシレルが、貞操は唯一無價の財寶にして是れを得んには皇后も市人の妻と競はざる可らずと誡めたもよく肯綮を當てゝ居るではないか。されば後來林羅山がこの戀塚の銘を記して、

吁節婦兮、惟孝惟義、石可泯兮　貞名不已

と、賞讃措かなんだのも道理である。

盛阿彌陀は袈裟御前の三年忌を終るまでこの戀塚の傍の草庵に念佛修行して一日も懈らなかつた、或夜、墓所の上に蓮化が開いてその上に袈裟の靈像が安然として座せる靈夢を感じ、覺めて後感涙に咽び、そのまゝの像を畫き本尊と

共に頸にかけ是れと共に喜び、之れと共に憂へて居られたことは強ち愛執の念があるのではなく、菩提の道に入りし善知識として仕へられたのであつた。

袈裟御前の三年忌を了ると共に此に文覺と改められ、これからいよ／＼上人が震天動地の宗教的活動の本舞臺に入るのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

風吹かばおきつ白浪たつた山
夜半にも君のひとりこゆらん

第五回　那智の荒行

紀州那智山にある那智の瀧は直下七十五丈と稱して素練絶壁にかゝり深樹響に搖れ飛沫冷風を喚び起こし三伏の候と雖も肌に粟するが如く日本一二を爭ふ大瀧である。

頃は十二月の十日過ぎであつた。六花霏々として降り積り氷柱立ちて谷の小川は音もせず、峰の嵐は絶間なく瀧の白糸垂水となり四方の梢も白妙への見分けさへつくることが出來なかつた、斯かる氣色を物ともせず白布を胸より腹に卷き金鈴片手に打ち振りつゝ口に千手經を讀誦して一心不亂に瀧壺に水垢離して居る一人の僧がある。

弓を射るやうな水勢に打ち流されては利刀の刃のやうな岩角に手をかけて本壺に復りつゝ一心に祈願を籠めて居る、五體も微塵になりそうである、一山の僧は驚愕の色をして打見護るのみである、これ餘人にあらず文覺上人の荒行で

上人の氣絶と不動の助け

あつた上人はこれまでに修行とは如何程のものかと、草も燃へんとする六月の炎天に或山里の藪に入り裸體となつて仰臥しいろ〳〵の毒虫が刺し喰ふを物ともせず七日七夜斷食して猶平然として居つたが今や骨も氷る寒天に荒行を試み不動明王の聖像に接しようとせられたのであつた。

斯く豪膽不敵の上人ではあつたが、五日目に至り勞れ果てたるにや誦經の聲も微かになり、金鈴の音も絶へ〴〵なり、全く身神惱亂してあはや命も終らんとした。この時何處ともなく二人の童子あらはれて上人の兩手を引き上げんとした。

上人は大に怒り、聲あらゝげ、

『這は何奴なるぞ、一七日も經たぬに、わが大願を妨ぐるとは佛敵かそれとも惡魔の所爲なるか』

時は十二月の嚴寒である、北風肌を刺し氷柱は錐の尖のやうである、上人の呼吸は絶へ〴〵で怒る言も喘へぎ〳〵續けて居るばかりであつた。フト上人は目を開いて見れば兩手を引きたるは鬢づら結ふたる美しい天童二人で香ばしい手をのばして上人の五體をくまなく撫で下ろして居る。夢のやうな心地の上人は今更の如く驚き、

斯くあはれみ給ふはそも如何なる人にましますぞや」

問ふ聲も杜切れ〳〵である。その時童子は聲も嚴かに、

『われ等は大聖不動明王の侍童にて金迦羅、勢多迦と申す者なるぞ、文覺無上の願を超し勇猛の行を企つ、往いて力を協せよとの明王の敕によりて來りつる

なり』

この靈告を得た上人は愕然として

『して明王は何處にましますにや』

『都率天……』

應への言葉よ　う雲井の空であつた。上人は掌を合せて、さてはわが行をば大聖不動明　で知ろしめし斯くまで護り給ふことのありがたさよと、その時の嬉さに一挺の鑿で荒木へ刻まれしが現今那智の瀧に殘つてある荒木の不動である。

それからは種々の瑞相があらはれ、吹き來る風も身にしまず、落ち來る瀧も湯の如く、かくて三七日の荒行は首尾よく滿願せられたが、上人は猶も千手經

一萬卷讀誦の大願を思ひ立ち觀音堂に立ち籠りて誦經せられた。

上人が千手經誦經の聲は峯の松風や瀧の響に相和して哀婉又雅亮、聞く人〳〵はそゞろあはれを催し尊信の念を嵩めぬ者はなかつた、上人が一萬卷を讀み了りて下山せられたのは三年の後であつた。

爾來上人は身を雲水にまかせ足の向くがまゝに各靈地を踏み破り給ひ殊に大阪の四天王寺は聖德太子の建立し給へるのみならず姨母衣川の參籠せる由緣もあることなれば追福の爲め暫く足を止め給ひ、落日の光りを西門に送りて轉た今昔の感に堪へず、靜かに常行念佛して菩提を吊ひ給へること二七日間であつた、

こゝからは都の空も程遠からぬ、胡馬北風に嘶き、越鳥南枝に巢ふ、誰か故

上人高雄にこもる

郷を慕はざる者あらん、上人思郷の念に驅られ給ひ都へ足を踏み入れられしが市中の物騒しきを厭ひて高雄へ引き籠られた。この時上人の名は到る所に喧傳せられ、めでたき修驗者よ、ありがたき上人よと活佛のやうに言ひ囃され、上人の入洛と聞いて早や都人は大騒ぎをして居る。

清麻呂神護寺を建つ

上人が引き籠られし高雄山には、神護寺と云ふ名高い精舍がある。

これはその昔、孝謙天皇の御世に道鏡なる僧が、天皇の寵をたのんで不臣を謀つたことがある、その時宇佐八幡宮の神托を質すべき勅命を蒙つたが和氣清麻呂であつた。清麻呂は宇佐に詣で謹んで神慮を伺ひ奉りその旨を具さに奏問に及んだ。道鏡はそれが爲め不臣を遂ぐることが出來なかつたので清麻呂を高雄の深谷にすてた。

神護寺の荒廢

その時、天皇より賜りたる一體の藥師如來を本尊として清麻呂は一寺を建立し神護國祚眞言寺と稱した。こゝには有名な三絶の梵鐘あり、當時は頗る繁昌したものであつたが、四百年の歳霜を經た今日では殆んど荒廢して居る。

紅楓溪に滿つれども訪づる人もなく、庭は草しげりて空しく狐狼の栖と化し四面垣頽れて寺僧絶へ、三絶の梵鐘は殘れど撞く者なければ夢も覺めず、金堂の扉は風に吹かれて落葉の下に朽ち、柱は雨にさらされて螢の光り淋しく照り畫楹斜めに殘り、欄干あるを留めず、今は樵夫草女が古を語る種となつてある。

このあはれな態を見られた上人はこのまゝ捨て置くには忍びぬ。宿因多幸にして佛門に入つたる身はかゝる破壞の堂舍を繕ひ、無緣の道場を訪ひて有緣の菩提を助け、濟度を平等に垂れてこそ剃髪染衣の本意ならめ、されど自力にて

造營すべくもあらねば勸進して十方檀那の助成を得んと決心せられた。

この時何處からともなく相照と云ふ一人の雲水が上人を庵室に訪ひ、禮を正しくして述べて申すやう、

『拙衲年頃より上人が高德を慕ひ奉るも浮雲の如く御草庵も定かなちず、心ならずも今日まで暮しつるが、今日値遇し奉るは盲龜の浮木に値ひたるが如し、たゞこの上の御願ひは何卒上人が御弟子として御許容下さるればこの上なく喜ばしく存ずる。』

上人これを見て、二三問ひ試みられしが何れも懸河の辯で應へ、志も仲々に强固な樣子で茲に意氣相投じ一見百年の舊知の如く、

『善哉〳〵、爾今わが弟子とすべし』

と、此に師弟の約は契られたが、爾來その情濃かにして影の形に添ふ如く、相照は絶世の豪僧が股肱となつて輔佐することになつた。昔はこの師弟の情は殊に厚かつたもので、時には兄弟や親子の中よりも濃かであつた。近來は人情が紙よりも薄くなり、師弟の情愛は著しく冷かになつて昨日の恩師が今日は路傍の人の如く冷視されて居る。師恩を忘れるやうではやがて國の恩も親の恩も忘るれのであろう。斯くては人と名づくることは出來ぬ。されば佛敎では四恩と云ふを說かれ、報恩の念は常にこと〳〵しく誡め給ふてある。

さて、文覺上人は弟子の相照とはかり、此に神護寺再建の勸進帳を認められた。

それ以みれば、眞如廣大にして生佛の假名を斷つと雖、法性隨妄の雲厚く覆

ひ、自ら十二因縁の峰に聳ゑ、以來本有心蓮の月、光り幽かにして未だ三毒四慢の大虚に顯はれず、悲哉佛日早く沒し生死流轉の衢冥々焉たり、只色に耽り酒に耽り、未だ狂象跳猿の迷ひを謝せず、徒らに人をそしり法をそしる豈琰羅獄卒の責めを免れんや。爰に文覺適ま俗塵を拂ひ、法衣を飭ると雖悪業猶意に逞しくして日夜に造る、善苗又耳に逆ひて朝暮に廢す、痛しいかな、再び三途の火坑に歸り重ねて永く四生の苦輪を廻らん、所以に牟尼の憲法千萬軸々、佛種の因を明し、隨縁至誠の法一として菩提の彼岸に屆かざるはなし、故に文覺無常觀門涙を落し上下親族の縁を上品蓮臺に結び、心を蓮んで等妙覺王之靈塲を建てんことを催すなり。

抑も高王は山堆くして、鷲峰山の梢にあらはれ、洞禪かにして商山洞の苔を舗く、岩石咽んで布を曳き、嶺猿叫んで枝にあそぶ、人里境遠くして囂塵なし、師跡棲み好くして信心あり、地形勝れて尤も佛法を崇むべし、奉加微なりとも誰か助成せざらんや、沙をあつめて佛塔をつくるの功德忽ち佛因を感す、何ぞ況や一紙半錢の財寶に於てをや、願くは再建成就して、禁闕鳳曆の御願圓滿乃至都鄙遠近親疎、黎民緇素、堯舜無爲之化を歌ひ、椿葉再改の咲みを披かん、況や聖靈幽儀前後大小速かに一佛菩提の臺に至り、必ず三身萬德の月を玩ばん、仍て勸進修行の趣き蓋し件の如し

治承三年三月　日　　文覺敬白

斯く勸進帳も出來上つたから上人はいよ〳〵勸進を思ひ立ち給ひ、相照と示し合せ、自らは都の中を、相照は洛外から北國筋へ赴いた。

西行法師上人を訪づる

この頃同じ雲水に身を窶し風流三昧に日を送る西行法師が居られた。上人も西行法師の有名なことを能く知つて居られたが、上人は西行と云ふは只歌を詠んで風流を氣取つて居る僞道心のやうに考へて居た、だから何時か西行に出遇つたら頭を叩き割り僞道心の皮をむいてやらうと力瘤を入れて居られた。或時斯くとも知らぬ西行法師は風流三昧の扮裝して高雄へ紅葉見に行かれたが、秋の日の短かさ、何時の間にやら暮れてしまつた。

そこで西行法師は上人の草庵を叩き來意を告げて一宿を乞はれた。取次ぎに出た弟子は大に驚き、さてはわが師が頭を叩き割ると云はれ居る西行が來た、定めし大事變が起るじやろと思ふたがさりとて取次がずにも置けぬでこの由師に通ずると、上人は座敷へ通せとあつて西行法師を奥へ請じた。

豪僧文覺上人と、風流三昧の西行法師、よい對照ではないか、今や師は西行に飛びかゝるであろうか、今に頭上へ鐵拳が下るかと襖の間から弟子は冷汗流して覗いて居る。

案外にも上人は西行法師を遇することが叮重である、互ひに城壁を設けず肝膽相照して快談を試みること數刻であつた。

翌朝に至り西行法師は厚く禮を述べ辭するに及んで上人はわざ〳〵送り出て叮嚀に別れを告げた。この始終の樣子を見て居つた弟子は合點が行かぬ、平生から上人は西行と云ふ僞道心者、若し遇ふたら頭を叩き割つてやると豪語して居られたから定めし大騷動が持ち上がると思つて居たに一見舊知の如く互ひに胸襟を開いての會談は如何にも不思議である。師の上人は常から荒々しく、好

んで壯言豪語をせらるゝやうな方ではないに、何と云ふ機會であつたやら、さりとて西行と云ふ雲水も僥倖であつたと思ひ、合點の行かぬまゝこの由を上人に尋ねた

「師は平生から西行と云ふ僞道心に遇ふたら頭を叩き割つてやるとの仰せなりしに、昨夜はゆくりなくもその法師が來り一宿せるに、師が平生にも似ず意外に舊知の如く遇せられ、法師が去るに臨みても叮嚀に辭を述べられしは如何なる事情のましますにや、この義承りたし」

その時上人は

『イヤとよ、この法師が頭割られざりしがまだしもの僥倖なりしよ』

と、應へられたとある。これは西行法師の柔和圓滿道氣が巳づから風采にあらはれて流石豪僧の上人もこの威德に制せられたのであろう。阿彌陀如來の四十八願の中には觸光柔輭の願がある。惡逆の凡夫でも五障の女人でも一と度この妙德に接してみると瞋恚の角も折れ、愚痴の氷も解けてしまうのは全くこの觸光柔輭の御德である。この御光明に遇へば洗除心垢と胸の中を汚す三毒の垢を御慈悲の水で洗ひ去つて下さるのである。

六方の如來舌を舒べて證す
專ら名號を稱して西方に至ると
彼こに到つて華開いて妙法を聞く
十地の願行自然に彰る。

第六回　法住寺殿の活劇

頃は、高倉天皇の治承三年彌生の月であつた、法住寺殿なる院の御所では管絃の御催しがあつたこの座に列なりしは何れも〳〵その道にかけては堪能の人のみであつた。

妙音院の琵琶

妙音院太政大臣師長公は古今無双と言はれし琵琶の名手、一と歳天下旱魃の砌り日吉神社で琵琶の秘曲を盡して神意を慰め三日三夜の強雨を得て旱魃を救はれ、雨の大臣とまで稱せられし達人。

按察大納言の笛

按察大納言資賢卿は笛の名人、この人の持たれし笛は紅葉の笛と稱して住吉明神が秘藏のものとか傳へる。簫の役には源少將雅賢、閑院中將公隆卿は和琴をかきならし、四位少將盛定卿は風俗催馬樂を、右馬頭資時卿は今様を朗詠し何れも秘曲をつくしての催しなれば心腑に徹し天上界も斯くやあらじと疑はる〻位であつた。

上人の亂行

この時文覺上人は是非の案内も乞はず常の御所の御壺の方へ進み出で天地に轟く雷の如き聲で勸進帳を朗々と讀み上げられた。

不意に入りたる荒法師、殿上人は苦々しく思ひ、口々にのゝしり、

『ヽザ物狂ひの荒法師ぞ、武士は居らぬか、引き出せ、疾く掴み出せ』

この聲に驚いて忽ち飛び出でし七八人の北面の武士、出でよ退けよと、押せども、突けども、上人は泰然として大磐石の如く身動きをもせず

『法師が勸進するに何の咎やあるべき、そち共もせめて莊園の二三個所も賜る

やう取次ぎ召され』

破れ鐘の如きその聲が太いばかりではない、憤りの顏色怕しく北面の武士は氣も心も奪はれて空しく手をつかねて見上げて居るばかりであつた、見るに見かねた平判官資行はツカ〳〵と進み寄り、

『コリヤ法師、汝は何處より來りつるぞ、當所を如何と心得るぞ、早く退かねば猶豫はならぬぞ……』

上人は一言の應へもなく、平判官をヂロリと睨んで冷かに笑はれた、判官はいよ〳〵瞋りに堪へかね、

『汝一言の應へもなく、剩へ冷笑を洩すとは言語同斷の無禮者、このまゝに捨て置くべき奴にあらず。』

と、胸に手を當てゝ押し倒さんとした。上人は手にしたる勸進帳をグル〳〵と卷かるかと思へば骨も摧けよとばかりに平判官の頭を打つた。强力の上人に打たれた平判官はそのまゝ大地に倒れ、烏帽子を飛ばしたが起き上ると共に殿上へかくれてしまつた。

時ならぬ落花狼藉に力自慢の北面の武士十人ばかり一時に上人へとびかゝた上人は勸進帳を左に持ち、右手には拔いたる一尺餘りの秋水、夕日に映つて物悽く、眦上り滿面朱を帶びて七尺五寸の大男が瞰んだ姿は天狗としか思はれなかつた。

法皇は各公卿に護られ給ひ御座を退かせ給ふた。こゝに信濃國の住人で安藤右馬太夫右宗と云ふ力自慢がある。法皇も御座を立ち給ひしかば上人を太刀の

峰で打ち下ろした。上人が少しひるむ隙を窺ふてムヅとばかり組みつき肱をとりて骨も摧けよと投げつけた。上人は飛鳥の如く起き上り此に双方共力聞勇ましく大地を踏み立てゝ爭ふたがその體宛然金剛力士の如く、互ひに組みつ組まれつ暫し勝負もつきかねたがこの時十七八人の院の歩士大手を開いて寄り集り上人が手取り足取りして搦め門外へ突出した。この時上人は無念の齒を喰ひしばり、

『かくも柔和の法衣を着し、悲慈の袈裟かくる修行の僧が、世々の帝の歸依し給ふ神護寺を造營なさんとするに斯くも辛き目を見るとは文覺よく〳〵の幸なき者よ。傳へ承るに御座席に在はす師長公は天晴博學多才ぞと承りしにかゝるためしをせらるゝとはこれ孝經を以て親の面打つ風情かな、貞觀政要の中には大人は赤子の心を失はずとこそ申したれ、臣愚痴にして君罰せらると云へり、古文少しも違はずものを、況や文覺と云ふは發菩提心の後淨行持律の聖僧なり、興隆佛法の爲めの勸進なり、然るにかゝる振舞せらるゝとは返す〳〵も口惜しき事なり、況や剃髮染衣の僧を打擲及傷に及ぶは稀代の不思議なり、噫世は末世になり極まれり、あな無慙の人々や、夢幻の榮華をのみ面白きことに思ひ、三塗常沒の猛火に焦れんことを知らず、唯今文覺が斯樣にせらるゝことは全く身の恥にあらず、汝等臣下鄉相の恥と知るべし、後生までとは愚かなり、遠くて三年、近くて三月が中に思ひ知らせん、その時後悔やし給ふな。』

と、上人は以前にも勝つた大音聲で御所中にひゞき渡れと叫んだ。この時資行

の下僕は主の仇と手をも首をも切り捨てばやと願ふたが院よりの御免しはなかつたし この後平判官資行は遂に剃髪染衣の身になつた。

上人は入獄してからも尚も悪口止まず、且つ神護寺造營はわが畢世の大願望なればわれはこれと生死を共にすべし、若しこの願望成らざれば生きて甲斐なきこの身なり、さればこれより斷食して生死の程を試んとこの後は一滴の湯水さゑ呑まれず專ら千手經のみ誦し居られた。

此に上人が弟子相照は師の坊が入牢し給へる由を傳へ聞き急いで都へ立ち歸り樣子如何にと探つてみたが師の上人は容易ならざる狼籍にて院の御怒りも殊に深く出牢の期やはかり難しと聞いて相照心も心ならず、何卒して救ひ出さんとあせれども素より三衣一鉢の出家の身であるから力及ばず、只この上は神佛

の冥祐を得るに如かじと、清水寺へ參籠し一七日間斷食して祈念を凝らした。

此に上人が入牢せられてからは兎角世間に奇怪の事多く、殊に上西門院が急かに隱れさせ給ひたれば宮中の噂もとり〳〵にて遂に非常の大赦を行はせられ上人もこの數に洩れ給はず再び天日を頂く身になられた。

清水寺へ參籠せる相照は滿願の曉に、師の存命疑なき由の靈告を得て高雄へ歸り只管師が出牢の日を待つて居たがいよ〳〵今日は大赦を行はせらる由の便りを得て廳の邊りへ出迎へ恙なき師の姿を見て悲喜の涙で頓に物も云へず師弟は互ひに手を執り合ひ法衣の袖を霑しつゝ高雄へ歸つた。

大赦に遇ふて高雄へ歸られた上人はそのまゝ意志を翻し勸進を思ひ止まるやうな法師ではない。尋常ならば先非を悔い、後慮を畏れて暫く引き籠るべけ

れど、信念が鞏固で、飽まで自信力の強い上人であるから爾來勸進すること昔日に少しも異ならず、黑衣の裳の短いのを着、同じ色の袴を脛高にはき、袈裟を掛け、太刀を横たへ、さし繩で作つた緒の下駄穿ち勸進帳を手に握りながら大路小路を行脚せられた。

殊に高位の公卿などの行列に出會すと、わざ〳〵聲を張り上げて

『噫、悲むべし、悲むべし、高官に登り榮耀をなすとも、これ夢の浮世の戯れなり、數多の供奉があればとて冥途はきはめて獨り旅、朱纓を錦闌に粧ふも野分けの前の草の露、消へ行くことを知らずして後の世知らぬ愚鈍さよ、南無阿彌陀佛、々々々々々……。』

又、武官などの馬をかざり、弓矢を列ね先拂ふて嚴かに過ぎ行くに會へば、

『南無阿彌陀佛、々々々々々、あはれ、あはれ、千石萬石の身上を松と竹とに比するとて、雪折れたるその後は、鳥邊の山の薪となる、七雄五伯も名のみぞや、さても笑止や南無阿彌陀佛……』

殊に御所の附近へ來ると、例の破れ釜のやうな聲張り上げて、

『因果は糾べる繩の如し、民に辛き目見するとは、さりとも〳〵……』

斯くも上人が嘲罵し止まなかつたは强ち神護寺造營の爲めばかりではなかつた、當時平氏一族の專横は頂點に達し、平氏に非らざれば人にあらざる如く、莊園國の半ばを領し、民の膏血を絞りて酒食に供し、上を侮り下を虐げ心ある者は見るに忍びざる横着をきはめた、上人の嘲罵はこの餘憤から出た一種の諷諫であつた。

古から愚に隱れ、狂に隱れ、酒に隱れ、奇に隱れ時世を嘲罵した人は少からぬ例のあることである、彼の一休和尚の如き、好んで狂態を演じ、奇矯を玩ばれたのではなく、時の僧侶が墮落腐敗し、徒らに僧官僧位を爭ふを事として衆生濟度の聖職と云ふことが殆んど眼中になかつたを憤られ、洒々落々たる吟咏の裡に一味の警箴を寓せられたものである

曾つて親鸞聖人が關東から入洛の際鎌倉へ立ち寄られた、その時幕府では諸宗の高僧知識を集めて一切經校合の催しがあつたので、親鸞聖人も幕府の請ひにまかせてその任に當られた。

一日これ等の知識方へ將軍家から饗應があつた、みれば魚鳥が交つて居る、そこで各高僧方は袈裟を外づすやら、法衣を脱ぐやらの騷ぎをやつて居るが聖人は更に頓着なく、法衣や袈裟のまゝで魚鳥の肉を啜つて御座る、この樣子を不思議そうに見て居つたのが最明寺入道時賴公で、その時は未だ九歲で開壽丸と稱して居た時分である。

開壽丸は靜々と聖人の傍へ來り、徐ろに法衣の袖を引いて、

『モシ〳〵、外の御僧は皆袈裟を外づして召し上がるに貴僧は何故外づし給はぬにや。』

九歲の子供としては隨分賢しい問ひである、その時聖人は莞爾として、

『外の御僧方は御身分が結搆で、かゝる馳走は常に召し上がらるゝも、愚僧は身賤しくて初めてのことなれば何思はずッイ失念仕りたり。』

聖人の御答へは至極平凡であつた。けれど開壽丸はまだ腑に落ちぬ、訝しそう

な貌つきをしながら退いた。

それから二三日經つてから又饗應が催され、聖人は再び袈裟外づさずに召し上つた。開壽丸は今日こそは忘れたとは言さじと、靜々と聖人の傍へ來り

『貴僧、過ぐ日は失念せりとの仰せなりしも今日も亦失念とは言ひ給はじ、袈裟外づさずして召し上がらるゝ御本意明かさせ給へ、開壽幼く侍れど仇な御返事にては聞き入れ申さず、御心の中打ち明け給へや。』

子供ながらも眞意を捉へよっと云ふ決心は明らかに見へた。聖人もだし難く、

『餘の高僧方は持戒堅固にて衆生濟生も容すかるべきも、愚僧は戒行持律とて一日もし侍らず、せめて袈裟かけたるまゝ魚鳥を喰はゞ袈裟の德にて衆生濟生も出來んと斯くは法衣のまゝにて食し侍るなり。』

『それが袈裟外づし給はぬ御本意なるか、開壽まだ訝しさは晴れ申さず。』

賢しい開壽丸は怪みの笑みを殘して去つた。古歌に、

世の中に尊がる人こそ尊けれ
殊勝ぶるひと尊くもなし

當時破戒無慙の諸宗僧侶が殊更法衣を脱し、袈裟外づしたるを寧ろ聖人は衷心あはれに思召したであろう。然るに聖人は更に賢善精進を粧はず飽まで愚禿を標榜して諷諫し給ふ、果して愚なるか、若し愚とせば百歳の後を洞視したる愚にして諸宗高僧の及ぶ能はざる愚であつた。

然るに文覺上人の行動は諷諫にあらずして激憤であつた、熱憤であつた、直諫肉に逼るのであつた。火山のやうに緣に觸れ機に隨ふて爆發した。

上人流刑と決す

あはれ上人は再び禁獄に投ぜられ、公卿僉議の結果伊豆國へ流刑に處せられ給ふことゝなつた、雨か雪か果た嵐か、上人が活舞臺は此に幕を開かるゝ機運に向ふた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

世間の人民善を修することを念はず、轉た相教令して共に衆惡を爲す、兩舌惡口妄語綺語覆賊鬪亂して善人を憎失し賢明を敗壞す。（大無量壽經）

第七回　流人文覺

伊豆國へ流罪と決まつた上人は源三位の嫡子伊豆守仲綱に渡された、折柄伊豆國住人近藤四郎國澄が年貢運送のため都へ上つて來たが、その返り船に乘せて流さるゝことゝなり更に國澄の手に渡され、外に檢非違使廳から下司二人附

下司上人に土產をうのかす

添へられた。

國澄は上人を船中へ召し連れて來たが、海上の都合で二三日鳥羽に逗留することゝなつた。古今を問はず下司などは隨分人格の卑い賤しい者であるが、上人に附き添ふた二人の下司もこの數に洩れず、上人をそゝのかしてよき土產物得んと謀り、

『御坊よ、この度は寛仁大度の御思召にて流刑仰せ付けられたるは御坊がこの上もなき幸ひにこそ、鳥羽から伊豆までと云へば海上はるゞ〳〵遠く、日數もかゝれば只官食のみにては道の程も慰み難し、御坊はこれまで隨分人に知られし方なれば知己に觸れ回して土產物を所望し給ふべし。』

下司は口を揃へて上人を說き初めた、

上人は、さては此奴等この文覺より賄賂を取らん所存か、官祿を食みながら卑しき心かなと看破せられたか、まて〳〵後日の誡めに一と泡吹かしてやらんと何氣なき體にて、

『親類緣者もなきにあらねど、身が身にてある時こそ自ら芳心もあれ、入道出家の後は諂ふ心なければ得意となることもなし、されば親類骨肉にも近づくこともなければ問ひもせず訪はれもせずして十餘年にもなりぬ、然るべき者あらんとも覺へず、たとひあるともあり甲斐あらじ、大方は我の人に物を與ふるにこそ得意となり、知る人は多けれ、法師は人を勸進して人に物を乞へば、疎む者はあれど親む者とてあらじ』

『御坊の言葉無理ならぬことなり、されど昔の知音もあるべければ、それ等へなりとも勸進してよき物得られよ』

上人下司を欺く

下司は口々に言ふ、

『さらばなり、斯く知音にまで疎まるゝ身にしあれど、東山に唯一人後生までたとひ無間の底までも行き眤つばんと、朝夕忘れ難く思ひ、思はれたる人あり、さらばこの人に申送りよき土產物調へ殿原にも好酒を得さすべし、いざ料紙を得させ給へ』

下司はホク〳〵して紙と硯とを上人の前へ進めた、上人件の紙を取り上げて見れば女房用の雜紙である、上人は敎然として

『奇怪なる奴原なるかな、人の品は消息にて知らるゝなり、よき紙を得て參られよ、これ他の爲めにあらず、唯今物得させて參らせん爲めなるぞ、疾くよ

き紙を調べ來られよ』

上人はあら〳〵しく言ひ罵ると共に紙を下司の前へ投げ出した。

流人にも似ぬこの荒々しい言ひ分に下司は一方ならず腹立て檢非違使の下司に奴原とは何事ぞ、法師にも似ぬ無禮極まる今の雜言と、咎めんとしたが、傍からこの法師こそ公卿殿上人にも惡口申す物狂ひ、天狗のやうな者にこそ、其上今物得させんとする人に、糶り合ふて詮なきことゝいたく制する者あり、下司は呟きながら上品の紙を取り出して上人へ進めた。

『紙を見つめた上人は更に筆執る樣子が見へぬ。下司は早く〳〵とせき立てたれば、上人は咳一咳して、

『そも我は天性筆執らぬ者なり、よく書かん人を請じ給へ、件の知己の人は目も心も辱しき人なり、文のやうも惡筆にては惡かるべし。』

下司能書の僧を請ず

重ね〳〵の申し條に下司は五月蠅思ふたが、此方彼方を走り回りて能書の人を尋ね求めて來た、上人は右の書家を膝近く招き寄せ、さて下司へ言はるやう

『殿原、聞き給へ、木につく虫は木をかぢり、萱につく虫は萱を啄むと申すことあり、能書を請じて能をあらはすには、必ず酒を進らせ、引出物をするが習ひなり、而かも土產所望の文なり、乞食だにも門出とて祝ふことぞかし、虛口には福樂なし、先づ手書きをよく〳〵もてなし奉るべし、さらずば書き給ふ可らず。』

上人の言葉は道理がないでもないが、下司の今の懷ろは至つて淋しい、けれど能書の人の前もあり、懷ろばなしゝて眞逆斷ることもならず、直垂を質入れし

て漸く酒肴を調へ、引出物には腰なる一刀差し出した。

書手の僧は思ふ存分酒を呑み、肴を食ひ、引出物を納め、さていよ／＼筆を執り、御文は如何にと問へば、上人は、この文覺が申すやう少しも違へずに書き給へと前口上を述べ、さも眞面目に口を開き、

高雄神護寺修造勸進の爲め、法住寺御所に奏聞の處、聊か敕勘を蒙り伊豆國に下向候、抑浮雲の身、朝露の命を惜むべきに非ずと雖、猶以て捨て難く候哉、旅糧の爲め預奉る所の鵝眼百貫、唇牙百石使者に附して申請くべく候、恐々謹言。

斯く書かせて之れを立文にし、表書は誰人ぞと尋ねられ、上人は破顔一笑、清水寺觀音御房へと書き給へと命ぜられた。

今まで上人の頤使に甘んじ、東西に驅け回り、直垂まで質入れしたるは何とかして好き物得んとの巧みであつたが、あまりのことに頓に言葉も出ぬ。上人は獨り手を拍つて笑ふて居る。

下司はハッハッと上人を睨み

『斯くまで廳の御使を欺くことやある、奴原とだに言はれてさへ不思議に思ひしに、紙ぞ、手書ぞ、酒よ引出物よとて、吾等は大切な直垂をも曲げ、傳來の太刀さへ打ち出したるに、嗚呼の事申す條後悔し給ふな、やがて思ひ知るべき時ぞあらん。』

下司は口にまかせて上人を罵倒した。上人は可笑さを忍んで、

『殿原や、仲直りして物申さん、觀音に利生申す人は嗚呼のことにやある、月

詣で日詣でと、夜も晝も踵をつぎて參る程の道俗貴賤はみな嗚呼のことなるか、文覺を惡口者なりと宣へども、殿原こそ口惡しき者よ、法師は上を惡口したりとて、伊豆國へ流さるゝなり、殿原は觀音を惡口すれば地獄の釜へ流さるゝなり、そも觀音の利生は法華經の中に、若有人受持六十二億恒河沙菩薩名字復盡形供養飲食衣服臥具醫藥と說かれて、大悲無窮の菩薩なり、廣大圓滿の御利生あり、殿原は貪欲飽くを知らず、かゝる物持たぬ法師に物乞はるゝ故に文覺止むを得ず、物持ち給ふ觀音に勸進して殿原へ賜はれと消息するを、嗚呼なりとは何事ぞ、馬鹿者めが。』

上人は念珠打ちしてハッタと睨まれたり。上人に一泡吹かされたる下司や梶取は詮方なくそのまゝ泣寢入りになつたが何に彼につけて上人を虐待し餘憤を洩

梶取の私語

上人梶取を欺く

した。

その翌日鳥羽の南門から船は出たが又々渡邊で二三日逗留することになつた

その夜遣戸の外で下司や梶取が何やら私語して居る、

『、、、勸進して……持てる寶……金品……奪ひ取るべし……。』

この恐るべき密謀を耳にした上人は曉に至り殊更忍び聲にて念珠揉みながら獨語せられた、

『南無歸命頂禮、高雄山の護法天童よ、神護寺造營の爲めに勸進の用途にて黃金百兩を買ひ、五條天神の鳥居を左の柱の根三尺お底に埋めて候、文覺今や伊豆に流され候も日ならず上洛致すべければ、夜の守り晝の護りと守護せしめ給へ……。』

この祈誓の聲を小耳に夾んだ下司共は、互ひに頭を振り合ふて悅び明くるを遲しと待ちかねて四五人打ち連れて密かに京へ上り、夜も更け人の靜まるを待ち五條天神の鳥居の左の柱根を三尺ばかり堀り下げてみたが、石や瓦ばかりで黃金らしきものは一向に見當らぬ、やがては五尺ばかりにも及んだが依然石や土ばかりである。

その時梶取の中の小賢しい男が口を開き、こは社からの左なれば、鳥居より手前からの右なるべしと、又も右の柱根を四五尺も堀つたが黃金の影さへさゝぬ、名ある聖僧の祈誓なれば萬が一にも違ひはあらじと、力の續く限り堀る內に、轟然たる響きと共に鳥居は倒れたが黃金は一向見當らぬ。

闇を劈く鳥居の響きに、神職共は何事ぞと手に〳〵照しを持つて出で來た物

音に下司共は再び驚いて闇の中へ消へてしまつた。

翌朝神職は急かに氏子を集め、此頃建てたばかりの鳥居が風も吹かぬ眞夜中に不意に倒るとはこれ神慮に憑はざる御知らせなり、神威畏るべしと、鳥居を建て替るやら臨時の祭禮を催すなど五條天神の氏子は大騷ぎをしたと云ふことである。

下司はこの失敗の不平を上人へ持ち込むと、上人は謀計の空しからざし可笑さに横手を拍つて打ち興じ

『この大地の底は金輪際とて黃金を敷き滿てり、そこまで堀らざりしことの恨めしき、たゞしこの法師の埋めたるは五條の天神ならずして北野の天神なり今一度上つて堀り下げ見られよ。』

何處までも揶揄せられた下司共は今更身の愚かさを恥しく思ひ顔見合して苦笑した。

今日は風も凪ぎ天氣も良し、船は渡邊の港からはなれた。船夫の唄ふ船歌は艫の響きに和し、何時しか住吉も過ぎ、玉津島明神を伏し拜み、由良、田邊の沖など後にして新宮の浦に船つけて熊野を遙拜し、南海道から灣ぎ回し遠江國にさしかゝり、名田の沖へ來た。此海からは船子も恐る遠州灘である。

俄然、天の一方に黑雲現はるかと思へば、瞬時に滿天墨を流したる如く、篠突く雨は右に左に、逆卷く千尋の浪は山なす波に次ぎ、船は恰も落葉の蛛網にかゝつて秋風に狂ふ如く、船長始め、水手必死となつて働けども、帆檣折れ、艫も梶も用をなさず、今は施すに術なく、危險は刻一刻に迫り、もう惡魔のなすまゝに任かすより外はない。國澄始め船中の者は一時に噪ぎ出した、念佛する者、觀音を念ずる者、叫ぶ者、喚ぶ者、泣く者、狂ふ者、宛然阿鼻叫喚の態である。

この大騒ぎの最中に上人は船耳を枕として鼾聲雷の如く響いてある。梶取りは腹立てゝ、

『御房、斯程の大風に何に臥し給ふぞ、チト起き出でゝ祈り給へ、人々の騒ぐ手前もあるものを。』

と、強く搖り起せば

『いたく騒ぐな、風波の止むまで誰も眠れ。』

と云ふて落付拂つて居た、何と云ふ豪語であろう、船は天に沖し、死の運命が

鼻先きへ來て居るに上人は泰然自若として言ひ放つた。不意に船の一角から歌ふ聲が聞へる、斯かる騒ぎの中に何者とみれば上人がさも面白そうに歌ひ囃して居るのであつた。

『憎つくき僧かな、無慙無愧の法師かな、たとひ叶はずとも、斯かる時こそ念珠爪繰りて祈誓すべきに歌ひ囃すなどゝは思ひに勝りし無智無行の法師ぞ。』

船夫共は震ひながら口汚なく打ち罵りて居る。この四面楚歌の聲を聞いて上人はガバと起き上り、舷に仁王立ちして遙か沖を睨み、

『コリヤ龍王や、龍王よ、海龍王共は居らぬか……。』

すべて海上生活をやつて居る者は龍神を非常に恐れて居る。暴風や激浪はみな龍神の怒りに觸れたるものと信じて居るからである、まして風波の荒い時なぞはさながら腫れ物に觸はるやうに怖れて居るのが彼等の常である。にも關らず上人は痛く龍神を罵倒したので船夫共は吃驚仰天して、物をも言はず法衣の袖を左右から激しく引いたが、上人は念珠にて打ち拂ひ、

上人龍神を叱す

海龍神共も確かに聞け、この船には大願起したる文覺が乘り居るぞ、予昔より千手經の持者として深く觀音の悲願をたのみたり、汝龍神八部は正しく如來說法の砌りに千手經の持者を守護せんと誓ひしに非ずや、然るに今この文覺を守らずば誰をか守らん、尋常ならばわが乘る船を手に捧げ、頭に載せて送るべきに、斯く風波を起す條奇怪千萬、速かに風を和らげ波を靜めよ、さもなくば第八外海の小龍奴等は四大池水の八大龍王に仰せ付けてなきものにすべし、如何に〳〵』

風波俄かに靜る

上人の斷食

破れ釜のやうな聲は海上はるかに響き渡つた。不思議、不思議、實に不思議である。沖吹く風も和いで來た、山なす波も靜まつて來た。今までは四面楚歌の聲で糞味噌に咒はれた上人が信仰の中心となり、尊き聖よ、持戒の出家よと、水を捧げ履を取り飽くまで敬服してやまなかつた。

遠州百里灘から順風に帆を上げて走つたがそれでも伊豆へ着いたのは渡邊を出てから三十一日目であつた。この間上人は斷食して心願を籠められたが氣力は少しも衰へず、其精力の非凡にして潑溂たる性行は到底凡人の及ぶ所ではなかつた

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

おしからぬ露の命をながらへて

一切衆生にあはんとぞ思ふ

奈古屋寺に於ける上人

なむあみだほとけをはこぶいで入の

いきのとまりは極樂の宿

——（親鸞聖人）——

第八回　文覺上人と源頼朝

伊豆國奈古野が奥に奈古屋寺と云ふ觀音の靈堂がある。近頃堂の傍にあやしき庵を結び閉ぢ籠もつてる一人の僧がある。晝は千手經を讀む聲朗らかに、夜は三時の行法怠りなし。こゝ過ぐる船客は轉た爐壇の煙に心をすまし、釣りする海士の揖枕燈籠の光りに目をさます、渚にあそぶ水鳥は梵唄の響きに驚き、藻に住む磯の鱗は閼伽の水にや浮ぶらん。世にも又なき聖ぞと、歸依の島人日に增して時には衣裳などを贈る者あれと返すは多く納るゝは稀れにして、惣じ

相照訪れ來る

て諂ひの心更になく、眞實の道心者よ、尊き出家よと噂は噂を生じ參詣の人は踵をついだ。

一日この庵を訪ね來れる一人の旅僧があつた。爾來共に籠りて、時にはさゝやくけはいなど外にひゞくこともあつた。これぞ豪僧文覺上人が配處の詫び住居にして弟子の相照が遙々師の後を慕ふて來たのであつた。上人は徒然のあまり島人の乞ふがまゝ人相を占はれたが何れも其人の運命に適中して露違はぬので一層評判が高まつた。

兵衞佐源頼朝が危き一命助けられて伊豆へ流され、轉た配處の月を恨でん居たのはこの奈古屋寺の附近であつた。母の常盤御前は愛兒の爲めに貞節を破り身を清盛にまかした。人の行末と水の流れ、榮枯定めなき浮世に破朝もさぞ

盛長上人の說をきく

今昔の嘆に堪へなかつたであらう。

胡馬北風に嘶き越鳥南枝に巢ふ、頼朝は都の空懷しく思ひ便りを戀ふるは强ち肉親の愛ばかりではなかつた。頃日奈古屋寺へ都から法師の下向せる由を耳にして心は矢竹に思ふたが配處の月を恨む今の身にしあれば人目もいぶせく、先づ腹心の家來藤九郎盛長をして上人の說きふりを聞かしむために遣はした。

上人は常に觀音の靈驗を說き仁義五常を述べては居るが何處と云ふことなく平家の無道を憤り、皇威の振はざるを慨き、慷慨淋漓として殆んど肺腑をついで出る言句は愚夫愚婦には一向分らぬが盛長の耳へは片言隻語が臟腑へ徹した盛長はこの由を頼朝へ通じたが猜疑深い性の頼朝は容易に信じなかつた。

けれど日數經るまゝに平家の間諜でないと云ふことは頼朝も信ずるやうにな

頼朝相照を招く

つたが、併しまだ〳〵油斷するやうな輕兆な人ではなかつた。一日先祖の供養に名を仮つて相照を請じ、形ばかりの誦經の後、頼朝は何氣なく相照に向ひ、

『花の都をはなれ、斯く草深き住居なれば都の空も明け暮れ戀しく侍るが、御坊には都のこと共も委しからん、細かにきかし給へ』

相照はこの問ひに對して

『愚僧共は元より三界無庵の身なれば左程にもあらねど、君こそは定めし都戀しく思召し給はん』

『イヤ御坊、余の都にありし時は人知れず苦勞致せしが、斯く配流となりしより寢食も心安らかにて、結句都よりは樂しく思はるゝ事のみ多し』

何氣なき座談にも斯く打ち消した頼朝の注意は頗る周到ではないか。相照は京

相照上人の性を說く

白川の有樣から藤氏、平家、前官當職公家仙洞の事まで得意氣に語つた。

頼朝は相照の長ばなしを頭を低れて熱心に聞いて居た、このはなしが盡きると頼朝は徐ろに口を開き、

『上人に見參したく存ずるが如何あるべきや』

『ソハいと安きことなり、庵室へ入り給ふや、又召さるべきや』されど師には時々物狂ひのやうに傍若無人の振舞せらるゝこともあり、それかと思へば又柔和神妙にして禪定に入るが如きこともあり、又事もなきに高聲多言して三尺ばかりの榊の枝にて是非なく人を打ち給へることもあり、大方は時雨の空の晴れ曇り、紅葉の秋の濃き薄きが如く心取り定めぬ、うつし心のなき人なれば、君もその意にて見參し給へ』

上人の性行を聞いた頼朝は思はずカラ〳〵と打ち笑ひ、

『心得たり、余もその意にて見參すべし』

相照は庵室へ歸り頼朝の希望を師に告げた、

その後二三日を經て頼朝は只一人盛長を召し具して上人の庵室へ忍んで來た、

相照は叮嚀に客間へ通して斯くと師へ告げた、上人は一時あまりも居間に何やら呟いて居られたが、やがて客間の外を黑い脛を現はし法衣をからげミッシリ〳〵と板敷踏みならして二三回往復せられたが、急かに客間の障子を引き開けて客人には一禮だにせず頭だけ差し入れて、ヂット頼朝を睨むかと思へば又片眼で覗き込み、仰いで睨み俯して睨み、斯くすることが五六回であつた。

頼朝は豫ねて相照から性行を聞て居るで、さては又上人は物狂ひせしか、今

に打つか、若し打たば逃げ出さんか、斯くもせんかと、殆んど現し心もなかつたが、何氣なき體を粧ふて泰然と座に就いて居た。

漸く上人は客間へ入つた、頼朝に向い卒然口を開いて

『御邊は故下野殿の三男とこそ見奉れ、歳の若きにも似ず、いたく憎まれ給へり、いとほしや〳〵』

上人は潸然たる涙のうちに兩手をついで叮嚀に頭を下げられた。

『如何に御邊、　今は全く平家の日本、平族一門の憍慢はその極に達し、上を侮り下を虐ぐ惡逆無道の振舞のみ、文覺、朝威振はず平氏の專横に泣くや久し、されど日本國中を修行し六孫王の末葉とて見參するに大將となつて一天四海を奉行する人更になし、勇のみありて智なければ人思ひつかず、性穩か

なれば柔弱に流れて威なし、穏かにして威なきも身の難、勇みて猛きも人の怨にこそ、まこと威ありて穏かならんには國の主となるべし、今法師が御邊を相するに心穏かにして威應の相あり、項羽は心驕うて帝位に昇らず、高祖は性穏かにして諸侯を從へり、あゝ御邊こそは末頼もしき人にこそ、あゝ目出たし〳〵』

上人が高々と三嘆せられたのには確かに頼朝は臓腑を抉ぐらるゝやうに感じたであろう』

頼朝は何氣なき體にて辭し去つた。

この後頼朝は經習ふ爲めとてしば〳〵上人の庵を訪づれた。

一日上人は頼朝に向ひ、

上人頼朝に反旗をすゝむ

『余の申すまでもなく、昔より朝廷を守護し奉り四海を治むる職分は源平兩家に限り、中にも源家は平族よりも盛んなりしが去ぬる保元の頃より太政入道の勢ひ頗るあがり源家はあれどもなきが如く、待賢門の戰陣には痛ましくも下野殿には悪左府に與みし給ひしより一天四海は恰も清盛の掌中に歸し、彼悪逆無道にして今や宿運すでに盡きんとす、小松内大臣には智仁勇の人なりしも去ぬる八月薨し給ひしこそ平家一門の運の盡き、今や源家の中にては御邊に勝る人なし、早く思ひ立ちて奢る平氏を討ちて父の仇を報じ、上朝威を恢復し奉り、天下億兆の民を安じ給へ、この法師の眼は左は不動明王、右は孔雀明王の御目なり、されば人の果報を知り、日本の内を照し見ること掌を見るよりも明かなり、今や御邊が膺懲の旗を上げ給ふ好時機なり、イザ正

義の白旗を翻して悪逆の者を誅し給へ』

上人の説かるゝ所言々みな血涙が迸しつてあつた。

頼朝はやをら口を開き、

『余が身たるや敕勘を蒙り居れば日月の光りにあたるも憚りあり、且つや池殿の請ひによりて危き一命助けられたれば、如何に弓矢を以て平家に向ひ侍るべきや、若し父の仇を報ずとせばその敵の子孫亦その仇を報ずべし、展轉反覆して遂に死期ある可らず、斯くては却つて先立ちし人の悪業を増長すべけれは、鬪諍の志など曾つて思ひしことも侍らず、せめては經誦し、佛名を唱へて池殿の菩提を吊ひ、父の苦惱を救ひ申さん所存に外ならず、御房の如きは出家の身としての勸めとも思へず、近頃奇怪に存ずる次第なり』

頼朝はまだ〳〵上人を疑つて居る、この頼朝に謀叛させて首掻き取り敕勘の身を免れようとするのではあるまいか。疑心暗鬼を生ずで疑ふてみれば隨分怪しい節々がないでもない。迂濶に煽がれて應とは言へぬと、警戒をさ〳〵厳重である。

卒直な上人はこの態度をもどかしく思ひ

『御邊は何に惑ひ給ふや。天の與ふるを取らざれば反つてその咎を受けん、時至つて行はざればその殃ひを受けんとは古德の格言にあらずや。それ武王の紂を討ち給ふは天の與ふる所なり、今御邊の運の開きつるは天の與へなり、時の至れるなり、疾く擧げ給へ疾く〳〵』

この時上人は、御目にかくべきものありとて懐ろ探つて古き白布の包みを取り

出し、徐ろに解いて頼朝の面前に供へたは見るも怖しい一つの髑髏。

『御邊、こは餘人の首級にあらず、御父左馬頭殿の首なり、平治一亂の後は獄舍の前に埋もれ、あはれ匹夫罪人の首と同じく文覺見るに忍びず、獄守に貰ひ受けて後生を吊ひ奉りし程に計らずこの島に流され、はるゞ持ち來れども、居は氣を移すの例にて御邊の心裏にして若し甲斐なくんば見せ奉るもその詮なし、されど近頃御心の程を窺ふに却つて文覺が心底を知り給はず、疑心未だ晴れざる樣子文覺恨めしさに堪へず、イザ御父君の首なり、改めて見參し給へ』

一語は一語より鋭く、語り終つた上人は潛然として熱涙にむせんだ、

頼朝は件の髑髏を膝の上に据へ打ながめつゝ滂沱たる涙は瀧のやうに落ちた

義朝頼朝を愛す

義朝は生前澤山の愛兒の中でも殊に頼朝を鍾愛し、膝の上へ乘せて鬼武者〳〵と戯れたことが、頼朝の頭の裡にはまだ昨日のやうな感じがして強く印象されてある、それが今見るさへあはれな髑髏の姿……頼朝は五臟六腑を八つ裂きにせらるゝやうに感じた。

時に頼朝は熱涙を打ち拂ひ、

『御房が重ね〳〵の御志し、謝するに辭なし、そも〳〵時至ると仰せらるゝが身は今や敕勘を蒙りながら軍門を張りて矢一筋だに射るならばこれ朝敵にして天意に副はず、若し敕勘もゆるされ、院宣をも蒙る身ともならば、時至ると申すべし、今はかく流人の身なればたとひ思ひ立つとも氷を湯に入るゝが如し、口惜しき身の分野にこそ』

上人上洛す

又も頼朝は雙袖を濡らした。

この道理ある言葉に上人も甚く動かされ、

『然らば文覺これより都に上り院宣を仰ぎ來るべし、早くて七八日、遲くも十日内には歸り來るべし、天に目、壁に耳の習ひ深く秘し給へ』

豪僧文覺上人と、源家の嫡流頼朝との間にいよ〳〵平氏追討の默約を結ばれたその翌日上人は七日間入定すと觸れこんで夜に紛れて上洛せられた、平家が治承の奢りも木枯しが吹き初めて來た。

第九回　平氏追討の院宣

春は南殿の櫻に心をとめて日を暮し、九夏三伏の暑き日には泉を掬びて心を慰め、秋は雲の上の月を獨り見んことを許されず、玄冬素雪の寒き夜はつまを重ねて暖かにす、長生不老の術を希ひ、蓬萊に不死の藥を尋ねても只久しからんことを思ひ、一門の榮華はさながら天上界の如き平族も、無情は春の花、風に隨ひて散り易く、有界は秋の月、雲に伴ひて隱れやすし、あはれ二十年の春の夢も今や覺むべき曉の光りが天の一角から催しそめた。

七日間の入定と觸れこんだ上人は夜を日についで陸路福原の新都に着き、院の近習で上人が外戚のゆかりある前兵衛督光能を訪ね、院宣を下し給はるやうの傳奏を請ひ、八日目の夕方瓢然頼朝の館へ現はれた。

『先日御邊には、敕勘の身なればとて歎き給ひし理に伏し十日の内には御返事すべきやう申し侍りしが、その翌日より陸路福原の新都に至り平氏追討の院

宣を請ひ奉り來れり、イザありがたく拜し給へ。』

と、上人は頭にしたる錦の袋を恭しく床の上に据へ奉つた。

頼朝は滿面に欣びの色を湛へ、禮服に取り換へ、手を清め、口を嗽ぎ嚴かに拜受した。

平家追討院宣事

早可追二討清盛法師並一類一事

右君子不レ直人者令一民成一レ愁姦臣在二于朝一者賢者不レ進彼一類者曾非レ忽一諸朝家一失二神威與一佛法一既爲二佛神之敵一亦爲二王法之朝敵一仍仰二前右兵衛權佐源頼朝朝臣一宣二令一追二討彼輩一早退二怨敵一奉二安宸襟一矣依二院宣一執達如レ件

治承四年七月五日

謹上　前右兵衛權佐殿

散位光能奉

頼朝は再び三たび首に押しあてゝ拜した。この時上人は

『イザ斯く、院宣を下し給はる上は急ぎ旗上げの御用意あるべし、御運も瞬く中に開け給ふべし、それに付ては文覺特に一つの御願ひこそあれ、素とこの法師が伊豆に流されたるは平氏の專横を惡むにあれど、又一つには高雄神護寺を再興せんが爲めなり、されば御邊が天下を奉行し給へば先づ神護寺へ庄園を寄せさせ給へ、これ文覺が特に願ひ入る次第にこそ。』

頼朝は微笑を洩し、

『運も强く、軍さにも勝ち日本國を奉行するに至らば必ず望みにも任すべし。』

『イヤ〳〵、物が手に入つては仲々惜しくなるものなり、今の中に寄せ給へ、先づ日本國にても文覺が望む所は……。』

上人は言葉と共に筆を執り、首を左右にふつて、

丹波國にて新庄、本庄、雀郡、宇津、繩野、播磨國にて五ヶ庄、土佐國高賀茂郡

等の十三ヶ所を指出して、

『イザこれに御判を加へ給へ。』

と、強いて差しつけられ、頼朝は猶も笑ひながら件の紙に書き判を据へて上人へ渡した。

この時上人は懐中より一つの卷物を取出して

『斯く御邊が運の開け給ふも單へに佛菩薩の守護によると雖、猶心の上には油斷召さるな、油斷あれば必ず魔障入りて善も惡に變ずべし、御邊が御覽への爲めにこの一卷を進ずべければよく〳〵つゝしみ給へ。』

頼朝は厚き上人の意を謝して件の卷物を開けば、十二個條が記されてある。

第一　天地の恩を重ぜよ。
第二　國王の恩を重ぜよ。
第三　父母の恩を重ぜよ。
第四　先祖の恩を重ぜよ。
第五　分限を超へて榮耀する勿れ。
第六　小敵と見て侮る勿れ。
第七　色に耽ける勿れ。
第八　酒に長ずる勿れ。

第九　人を殺すことを好む勿れ。
第十　罰を重くし賞を輕くすること勿れ。
第十一　學問を廢する勿れ
第十二　源氏繁昌の祈禱を懈る勿れ。

上人は、この十二個條堅く守るべきこと、猶奈古屋寺では、朝敵調伏、源氏繁昌の祈禱をすべしと、舘を辭し去られた。

頼朝はいよ〳〵義兵の旗を擧げんと決心した。先づ首途のしるしにとて、治承四年八月十七日に、北條時政、宗時、義時、佐々木太郎兄弟、その外土肥、土屋等の八十五騎をして伊豆目代義隆は襲はしめ、超へて二十三日には二千餘騎を具して石橋山に戰陣を張つた。頼朝が義旗を擧げたる噂を耳にした豪族は

先きを爭ふて四方から馳せ加つた。さればその勢ひ破竹の如く、攻むれば取り戰へば勝ち、恰も無人の境を行くが如く、鎌倉に入つた時はその數五萬騎と註せられた。頼朝は此地を本陣と定め、萬機の指揮を下した。昨日の流人が今日は義兵の總大將變れば變る世の分野ではないか。

第十回　神護寺の造營

頼朝が謀反の早馬は福原の上下を騷がした。忽ち公卿僉議は開かれ、一日早く源氏に兵勢の附かぬ中にとて、維盛を大將軍とし、忠度を副將として、治承四年九月十八日新都の福原を發陣し十月十六日に清見が關へ着いた。都をば三萬騎で出たが、今では七萬騎に增し、富士川を距てゝいかめしく陣構へした。

夜に入つて四方を見渡せば、土民が軍に怖れて山に入り野に隠れ、或は船に乗つて海に泛んでる火を見て、さては聞きしに勝る野も山も、海も河も源氏の武者ばかりぞと呆れたが、水鳥の羽音を聞いて、スワ源氏の夜襲ぞと、先きを爭ふて逃げ失せ、後來までの笑ひ草を殘した。

都では、平相國清盛が熱病に襲はれ、われ今生の望みは一事として思ひ置くことなし、只思ひ置くことは、兵衞佐頼朝が首を見ざりつることこそ何よりも本意なけれ、我如何にもなりなん後は、佛事孝養もすべからず、堂塔をも立つべからず、急ぎ討手を下し、頼朝が首を刎ねて、わが墓前にかくべし、これぞ今生後生の孝養ぞと、悶ゑ死した。

旭將軍義仲を初めとして四方の源氏は競ふて蜂起し、今や平氏の運命は風前

の燈火よりも危うなつて來た。

この報知を耳にした上人は初めて愁眉を開いて喜んだ。一日弟子相照を近く召し、

『この法師が伊豆に流され、且つは物狂ひの態せしは一つは平氏の專横を惡み天に代つて源家に誅せしめん爲め、二つには神護寺造營の志にて、これ等を世に隱さんが爲めなりしも、今や清盛入道も卒し、四方の源氏も蜂起して頼朝の開通掌を見るよりも明かなり、されば最早物狂ひの態も沙汰するに及ばず、身を隱す要もなし、われは是れより洛に上り事の仔細を探るべし、汝は暫く此地に住し、われに代りて行ふべし、神護寺造營の事にもかゝらば汝も都に上り來るべし、これにて暫くの別れをなすべし。』

義仲の暴虐

と、上人は單身孤影飄然として都を指して上られた。

今までは善美を盡し、華を街ひし平氏の住家も、或は燒かれ、或は倒れ、たまさか殘る家も門前雀羅を張り、訪づる人もなければ住む主もなし、流石上人も轉た今昔の感に打たれた。

この時都の中では、木曾義仲の勢威あらあらしく、貴女に戯れ、權門に畏れず、佛閣神社を毀ち、青田を刈つて秣に當て、人の家を破つて物を奪ひ、上を侮り下を虐げ暴戻極まりなく、山猿のやうな振舞をした、

されば院の御所より義仲へ、暴戻の武士を取り鎮めよと、院宣の下りしに、義仲は言葉もあら〳〵しく、

「都の守護してあらんずる者が、馬一疋づゝ飼ひて乘らざるべきか、幾らとも

義仲法住殿を襲ふ

ある田ども刈らせて秣にせんを、強ちに、法皇の咎め給ふべきやうやある、兵糧米つきぬれば冠者原共が西山東山の片ほとりにつきて時々入取りせんは何かは苦しかるべきや、大臣以下宮々の御所へも參らばこそ僻事ならめ……」

且つ院宣を齎し奉つた平知康をサン〳〵に罵倒し、遂には六千餘騎を率いて院の御所なる法住寺殿を圍んだ、先づ義仲は法住寺殿の西門へ押寄せてみれば平知康は片手に鉾を持ち、片手には金剛鈴を打ち振り、御所の西の築墻の上に立ち、大音聲を上げて

『昔は、宣旨を向いて讀みければ枯れたる草木も忽ちに花咲き實なり、飛ぶ鳥も地に落ち、惡鬼惡神も從ひき、末代澆季なればとて、いかでか十善の君に向ひ參らせて弓を引き矢を放つべき、放たん矢は却りて汝等が身に立つべし

抜かん太刀は却りて身を切るべし』

口にまかせて罵つたも無理ならぬことである、この時今井兼平が鏑矢の中へ入れて御所の屋根へ射立てたれば、折柄霜月十九日の荒風烈しく、猛火忽ち天に燃へ上り、焔は空に満ち渡つた、法皇は御輿に移らせられ、五條内裏へ入らせ給ふたが、義仲は嚴重に守護し奉つた。

かゝる、義仲の狼藉を目擊した上人は憤慨に堪へやらず、一と度は、法皇の天機を奉伺して慰め奉らんと思ふたが、イヤ〳〵慾に顔出して尤めらるゝも詮なし、今は鎌倉に下りて頼朝にありし次第を知らせ木曾を膺らすに如かずと夜を日についで鎌倉へ下つた。

上人からありし次第を聞き了つた頼朝は、

頼朝義朝の首を請ふ

『同族の源氏が朋軍するは本意ならねど、木曾の狼藉捨て置き難し、且つは院宣に背く朝敵なれば一日も猶豫なり難し、速かに範頼、義經を遣はして追討すべければ師も心を安せられよ、平氏の如きも近く西海の藻屑と消ゆべければ怖るゝに足らず、されば日外師が求められし庄園も相違なく寄附すべければいよ〳〵神護寺造營に着手せられよ、それに付て師へ折り入つて願ふべきことあり、そは先年師が父の髑髏なりとて見せ給はりしが、只義朝と聞いて落涙し、平族を憤りしも、これは師が頼朝の志を立てんが爲めに外ならずまこと義朝の首は獄門の角に埋めありと承る、法皇に於かせられ若し親子の情あはれと思召さば件の墓を發きて髑髏を賜はらば、頼朝の光榮望外に存ずることなり、この義よろしく取り計られたし』

親を思ふ頼朝の衷心亦あはれである、上人は聞き了つて、

『こは法師に副ふた御使ひにこそ、必ず院へ奏し奉り御望みのまゝに計らひ遠からず御伴して下着すべし』

そも昔から朝敵の首は、平將門から以下の首が兩獄門に納めてあるので、上人がそれを堀り出すべき筈がない、頼朝に見せた髑髏は奈古屋寺の海岸に曝らされてあつたを拾ふて來て、叮寧に布で包み、義朝の首ぢやと偽つたのであつた、仲々巧妙な手段である。

實際義朝の首は獄門の前の樗の木に掛けられてあつたのを、義朝が生前に一方ならぬ同情を受けた紺五郎と云ふ男が、昔の情けを忘れず、長く恥曝しになつてあつたを厚く葬りたいと、その筋へ願ひ入れて獄門の乾の角へ埋めて

墓を築いて置いたのであつた。

けれど頼朝もさる者、伊豆で見せられたは偽せ首とは知りつゝも、父義朝の名を聞いて思はず憤慨の涙を催したのであつたが、今上人を使として請ふたのは眞實父の首である。

上人は再び入洛してこの由を、法皇へ奏上した。法皇に於かせられても頼朝が至孝を深く感ぜさせられ、右の趣きを御嘉納あらせらるゝと共に義朝に太政大臣の顯位を御贈官あらせられた。

梟囚の首を發くさへ畏れ多いに、厚き御贈官の御沙汰を蒙り、天恩の辱さに上人は感涙に咽びつゝ、堀り起して見れば、額に義朝と銅に銘してあり、正清の首も同所に葬られてあつた。

頼朝父の首を拜受す

上人は義朝の首を蒔繪の函に入れ、錦の袋に包み自ら頸にかけ、正清の首は檜の箱に納めて布で裹み相照に持たしめ、御所からの御使宮内判官公朝卿と鎌倉へ下られた。鎌倉からは上人の下向と聞いて片瀬川まで御出迎ひの使者を遣はした

上人がいよ／＼鎌倉へ下着せらるゝと、頼朝は庭上に下り自ら上人の馬の口を取り、涙ながらに父の首を袖を開いて受けた。正清の首はこれも涙ながら娘が受取つた。この悲慘な親子の對面に居並ぶ大名小名も思はず兩の袖を絞つたと云ふことである。

頼朝は亡き父の首に、大政大臣の御贈官を報告し、併せて會稽の恥を雪いだことを涙ながらに物語つた。これ頼朝が至誠至孝の發現である。名將としての

頼朝は未だ多少の疑問がないでもないがこの悲劇の一幕は十分敬慕すべき價値がある。何となれば是皆彼が肺腑から溢れ出た至誠の塊りであるからぢや。

世の中にどんなものが威嚴があると云ふても誠程威嚴のあるものはない、又誠程偉大な感化力を持つて居るものはない、能辯家が百日の辯舌よりも至誠をこめたる一座の話の方が多く人を動かすものである。世に重盛の傳記をよみ、楠氏の歴史を繙く者は涙と共に卷を覆ふに至る、これ外に理があるのではない徹頭徹尾至誠を以て一貫せられてあるに自ら感化せられるからである

けれど吾々は人間である、凡夫である、若しわれ／＼の至誠を佛陀に比較してみれば誠と思ふは皆虚言である、僞りである、誠と思ふは一時であつて永續しない誠である、際限のある誠である、永續しない誠なれば眞實の誠と云ふこ

とは出來ぬ、賴朝が父に盡す至孝の念を以て何時々々までも、忘れず、この至誠を以て範賴義經に接したならば二弟は決して彼の如き逆境を以て身を終らぬであろう、源氏の系統は綿々として榮へたであろう、惜しい哉賴朝はこの至誠を續けることが出來なかつた。

賴朝ばかりではない、すべて吾々が誠と思ふて居ることは末通りがしない、階老同穴の契り細かな夫婦でも一度呼吸を絶つに至ると觸るさへ穢れると矢鱈に嫌ふではないか、すれば昨日までの誠盡しは僞りであつたのぢや、たわごとであつたのぢや。

子が親に死に別れる、涙ながらに野邊送りをする、これ子として當然の悲みである、けれどそれ位悲んだ子が三年七年と過ぎ行く中何時の間にやら親の恩

を忘れてしまう、遂には忌日命日は申すまでもなく、墓參するさへ五月蠅く思ふ、これでも親を慕ふ至誠があると言へるか、すれば初め泣いたのは眞實泣いたのではない、僞りであつた、誠ではなかつたのである。

眞實の誠と云ふは彌陀の御心ばかりである、この御マコトは昨日や今日出來たのではない、十劫の曉天から一子の如く愍んで下さるゝ誠である、この御マコトが溢れ出て、汝一心正念にして直ちに來れ、われよく汝を護らんと喚んで下さるゝのである、われ〳〵が一念誠のない、弱い、愚かな胸の中であると信ぜられた時、どうしてこの彌陀の御慈悲に感せずに居られよう、泣かずに居られよう、若し感ぜられぬ、泣かれぬと云ふ人があるならばそれはまだ自己の罪惡が自ら信ぜられぬからである。

大經に、愛欲に痴惡せられて、道德を達らず、瞋怒に迷沒し財色を貪狼す、之れに座して道を得ず、まさに惡趣の苦に更るべし、生死窮まり己むことなし哀しい哉甚だ傷むべしと、吾々日常の行動をこの金言の鏡に照して見ると、顏も上げられぬ程恥しいではないか、人格ぢやとか、社交とか、家庭とか、慈善とか口には言ふて居るが一と度照魔鏡を胸の中へ照し込んで見ればドレ位怖しいであろう。

十惡の法然よ、愚禿の親鸞と名乘り給ひしはわれ〳〵に對しては又とない嚴峻な、痛切な教訓ではあるまいか、自分は虛假である、不實である、愚かである、汚れた者であると自覺が出來たらば絕對無限の佛けのマコトに縋るより外はあるまい、それからは、吾々の周圍を離れず、夜に晝に、陰に陽に、表に裏に、無限の慈悲と、無限の力を以て守つて下さるゝみ佛の宏恩を謝するより外はない。

さて壽永三年に元曆と改元せられ、流石の木曾義仲も義經の一擊に逢ふて粟津原頭の露と消へ、平氏亦南海の鬼と化して、世は修羅の巷を送りて暖い太平の春を迎へた。

上人ば豫ねての宿志たる神護寺造營の期至れりと、勸進せられたれば、われ後れじと先きを爭ふて喜捨する者踵をつぎ、佛閣、僧院、客殿は申すに及ばず鐘樓から浴室に至るまで上人が理想通りに竣効し、その高德を慕ふて參詣する善男善女は毎日堂内に溢れた。

平氏の專恣を挫き、神護寺造營も意の如くなりしも、これ文覺が力の及ぶ所

に非ずして神明佛陀の加被力に賴ると、上人は益々戒行持律が堅固であつた。

二十餘春夢一空　豪華吹散海暝風
山排殺氣參差出　潮迸寃聲日夜東
憶昔滿宮悲去鶴　欲將往事問飛鴻
欄斑剩見英雄血　塹樹鵑啼染々紅

（梁川星巖）

第拾壹回　平氏餘蘖の掃蕩

榮枯盛衰は繩の如く、流石平族繁昌の二十年も壽永の花風に隨つて散り失せ到る所白旗翻々たる源氏の世を迎へた。昨は九重の雲の上に見し月を今日は八重の潮路に恨みつゝ此に悲劇の一幕を以て閉ぢた平氏の末路、誰か一掬の涙を

灑がざらん、暮れの新月も雲に伴れて隱る習ひ、名と云ひ利と云ふ畢竟春夢にひとしく、觀じ來れば人生五十年夢幻のみ、泡沫のみ、四大散じて桃季失せ、紅顏變じて餘すは只白骨のみ、噫……。

されば堂上榮花の夢を西海の波に覺まし、只名殘を波上の吹笙に止む、まことに果敢なきは平族の終りである、人の終りである。

賴朝が天下の覇權を掌握するに及んで、平子孫の全滅を企て北條時政を上洛せしめた。時政は六波羅に構へ平氏の子孫を日夜に尋ね回つたが思ふやうには見當りぬ。ソコで搜索の懸賞を出して、尋ね求めて知らした者は過分の恩賞に預るべしと觸れ出した。昔も今も變らぬは人情で、この懸案が出てから知るも知らぬもわれ後れじと搜索に努めた。昨日も五人、今日も七人と六波羅へ注進

北條平氏の子孫を虐殺す

がある、その中には實際平子孫でない者があるが、父母が悲歎にくれて泣きながら事實でないことを訴へに來ると、そは乳母が申したとか、隣りではなしがあつたとか理不盡に引き立てゝ來る。隨分壓制な仕打ちである。

その中でも幼い子供ぢやと、水に沈めたり、土に埋んだりするが、少し成人した者は刺し殺したり、突き殺したり悲慘極まる殺し方をやつた。燒野の雉子夜の鶴、子を思はぬ親はなし、掌中の珠と愛する一子をムザ〳〵刺し殺された親は狂氣の如く、泣き崩れ、駈け回り、喚ぶ者、叫ぶ者、呻く者、都の空は宛然修羅道の有樣である。

六代御前の捜索

旬日ならずして殆んど平族の子孫は捕はれてしまつた、けれど維盛の子、六代御前は平氏の嫡流で、この擧の眼目として居る所ぢやが一向に見當らぬ、これを取り逃がしては鎌倉へも申し譯がないと、時政は八方に手を分けて捜索したが更に分らぬ。

この六代と云ふは、申すまでもなく平家の直系で、曾つて父維盛が都落ちの時、母の夜叉御前と云ふは、斯くも甲斐なき女や子供をば誰れに預け、誰れに育めと打捨て給ふぞ、如何ならん野の末、山の奥までも相具し給へと慕ひ、六代は姉姫と父が鎧の兩袖に取りすがり泣き焦れたるを、維盛は恩愛の絆をふり切つて後事を齋藤實盛の子、齋藤五、齋藤六と云ふに托して出陣したと云ふ世に名高い悲劇を殘されたる子で今茲十二の稚兒盛りである。

時政は鎌倉よりの嚴命により、洛の内外を草を分けて探したが薩張り知れぬモウ詮方盡きて、いよ〳〵明日は鎌倉へ下向せんと支度して居つた黄昏時、一

六代御前の所在を知る

人の女が六波羅へ來て、是より西遍照寺の奥、大覺寺と申す山寺の北、菖蒲谷と申す所に、小松の三位中將維盛卿の北の方が、若君姫君と共に住み給ひゆゝしく人に隱れ給ふと、注進に及んだ。

時政は雀躍して喜び、鎌倉下向も延引にして、翌日偵羅の武士を菖蒲谷に放つた。

案に違はず或山寺の奥に澤山の女房が幼い子供を伴れて非常に人目を忍んで住んで居る一族がある、武士は籬の隙からソット中の樣子を覗いた。

かゝる惡魔が外に居るとは露知らず、家の中から白い犬が走り出したを、それを捕へんと續いて飛び出た一人の美しい公達がある。スルト又も一人の女房が慌て出て、あなあさまし、人もこそ見侍り候、急ぎ入り給へと、痛く制して入

北條大覺寺を圍む

れしめた。

この樣子を籬の隙から覗いて居た偵羅の武士は、六代に間違ひなしと目星をつけて、六波羅に注進した。

次の日、北條四郎時政は警固の武士を數多召し連れて六波羅を出で、菖蒲谷を四方から圍み、使者を入れて告げしめた、

『小松の三位中將維盛卿の若君、六代御前これにまします由承りて鎌倉殿の御代官として北條四郎時政御迎へに參りて候、疾く〳〵出し參らせ給へ……

……』

この寢耳に水の捕手に一家の驚きは譬へようも言ひやうもない。中にも夜叉御前は氣も心もうつゝになりて、六代を膝の上へヒシと懷き上げ、

『イザ妾の首を先きに打ち、それからこの子を捕へよ、命のあらん程はよも放ち侍らじ、疾く〳〵妾の首を刎ねよ』

健氣に言ひ終ると共に、六代の肩に泣き伏し、あはれ落涙千行萬行……

乳母を初めとして數多の女房は疊の上に平れ伏しになつて泣き叫ぶさま、目もあてられぬあはれさである。

齋藤兄弟は今日の不意打ちに色を失ふたがそれでも男である、若しや密かに逃し奉る所もがなと、屋敷の中から山の方を立ち回つて見たが、警固の武士は嚴重に取り圍み、蟻の匍い出る穴もなく、詮方なく立ち戻り、固めの兵は四方を圍んで今は出し奉る所もなしと、互ひに手を執りて泣き沈む。

今までは忍びの家ぢやとて、聲をのみ目をひそめて、ゆゝしく大事を取つて

居たが、今はあらん限りの聲を絞り出して泣いて居る。

この恩愛別離の悲慘を見聞する者誰一人として涙を催さぬ者はなかろう、時政を初め居合す侍も流石あはれに思ひ鎧の袖を絞つた。けれど時政は今は猶豫すべきにあらずと、侍をして傳へしめた。

『世も未だ靜まり候はねばしどけなき事もこそ候はん、時政が御迎へに參りて候、別の仔細は候まじ、疾く〳〵出し參らせ候へ』

急き立てらるゝ時政の言に六代御前は賢かしくも母に向ひ、

『遂に遁れまじく候上は早く出させなばしませ、武士共の多く入りて搜す程ならばなか〳〵うたてげなる有樣を見へさせ候はん』

夜叉御前は、涙にくれて返事も出來ず、未だ確かと膝に抱いて居る。

『喃、母御前、たとひ罷り候とも暫しもあらば北條とかやに暇乞ひて歸り參り候はん、いたく嘆かせ給ふな、のう母御前』

宥むる子も、宥めらるゝ親も恩愛の涙は瀧のやうに落ちる。

屠所の羊のそれならで母は死地にも入る心地で六代御前の着物を取り換へ髪かきなでゝ化粧を施し、又も泣き伏した。

やがてムックリ起き上がると思へば小さい黒木の念珠を取り出して來て手に渡し

『相かまへて、これにて如何にもあらんまで念佛して極樂へ參られよ』

六代御前は件の念珠を手に受けて、

『今日母御前に別れ奉る上は何處なりとも父君のまします所へ詣でたく侍る

親子の訣れ

人生は苦の塊なり

今まで傍に泣き伏して居た妹姫は今年十歳であるが兄の健氣な言葉を耳にすると共に、われもその道に參るべしと飛び出したを乳母の女房は抱き止めた。

六代御前は幼少ながらも敵に弱氣を見せまじと、抑ゆる袖の隙から餘る涙を拂ひつゝ迎への輿の中へ入つた、夜叉御前は輿に手をかけ泣き崩れた。

鳴かぬ螢も鳴く蜂も、今も昔も、貴きも賤しきも子を思ふ親の恩愛にかはりはあるまい、まして六代御前は、良人維盛の遺れ形見で、戀しき時も、焦るゝ時もせめて心のやり所と育んだ心も水の泡、今朝の生別死別を兼ぬ、恩愛別離に泣き崩れた親子の衷心、察するさへ涙が催して來る。

實際この世の中は苦の塊である、苦を離れた眞實の樂と云ふことは到底求め得られぬのである、面白いと云ふも、嬉しいと云ふのも何處かには苦が潛在

して居るのである、よりて釋尊は人生五十年の苦を八つに別ちて示されてある

第一は生苦で母の胎内に宿りてから十月の間は苦み勝ちで、産れた時も身體が輭かであるから指が觸つても及で斫られるやうな痛さがするのである、第二が老苦で、何時の間にやら年は過ぎ去つて頭には白髮を頂き、耳も目も疎くなり、腰は曲りて手足の自由はきかず、食物も次第に味がないやうになつて獨り苦まねばならぬやうになる、第三は病苦で、この體は四百四病の容器であるから思はぬ病ひに罹り氣力も疲れ、四肢も自由ならず人知れず苦まねばならぬ、第四が死苦で、この體は地水火風の四大から成立つて居るのであるが、イザ臨終となるとこの四大が散るのであるから、ソヨ吹く風でも及で切らるゝ如く、氣息は刻々に迫り、四肢五體は縮み三寸の息の絶ゆる時は及を以て寸斷にするやうな苦みがある、第五は愛別離苦で、人生は何時も春風駘蕩たる花盛りばかりではない、一家團欒の花盛りも思はぬ夜半の嵐につれて、親は子にはなれ、妻は良人に別れ、一家東西に離散し、そゞろ昔の榮華を偲ぶ苦境に陷らねばならぬ、第六が所求不得の苦で、人と生れた者ならば、立身榮達を望まぬ者はなけれども、欲する所の半ばにも至らぬが世の中の常で、恨みの涙と共に一生を終らねばならぬ、第七は、怨憎會苦で今までは水の洋々たる平和の間でも一朝違境に遇へば怒濤氷を卷くやうな仲になつてしまうが人生の常である、第八が憂悲惱苦で、五十年の人生は憂ひや悲みばかりである、火事を恐れ盗難を怖れ天災地變を怖れ、病氣に悲み恩愛に泣き、憂悲を以て覆はれてあるが人間の一生である。

六代御前と愛別離宮

今六代御前は正しく愛別離苦に陥つて居るので、そのあはれさが目の前のやうに思はれそゞろ同情の涙が禁じられぬ有様である。

輿の中からは忍び泣きの音が洩れる。齋藤兄弟は歩む足も亂れ勝ちに輿の左右に侍つて行つた。この掌中の珠をさらはれてから、淋しい〳〵黒闇が一家を覆ひ、忍び泣きの聲は終夜室の隅々から洩れ聞へた。

翌朝、齋藤兄弟が六波羅から歸つて來て、若公樣には別の仔細候はず、委細は御文にこそと、一通の書面を夜叉御前に手渡しした。一夜を千秋の思ひで待ち焦れて居た母は、執る手も遲しと披いてみれば、

六代御前の消息

今までは別の仔細候はず、さこそ御心元なく思召され候はん、いつしか誰々も御戀しくこそ思ひ參らせ候へど、夜叉御前の御あさしたい忘れ難くこそ侍

上人兒を救ふ披露せらる

れ

母はこの消息を顏にをしあてゝ又もヨ〻とばかりに泣き崩れ、何時泣き果つとも知れぬ。齋藤六は六波羅への首尾もあり、泣く夜叉御前を促して返事の消息文を懷ろにして出て行つた。

これより先き高雄なる文覺上人は、鎌倉より北條四郎へ洛し、平氏の根を絶ち葉を枯らさんと、無殘の仕打ちあることを聞き給ひ、かゝるあはれを他所に見んも無慈悲なれば、救はるゝだけ救はんものと、七歳以上の兒は弟子として一命を助くべしと、洛の内外に披露せられたけれど、素より鎌倉と上人との深い因緣を知る者は、斯く披露して探し出し殘らず失ふ手段であろうと誰一人救ひを求むる者がなかつたが、この噂がフト夜叉御前の耳へ這入つた。

夜叉御前上人にすがる

九仞の深淵に陷つてる夜叉御前はモウ上人に縋るより外はない、且つ上人は鎌倉の覺へも目出度ければ千に一つも頼み甲斐があるかも知れぬと、一人の女房を伴れて、歩みも馴れぬ山道を高雄の神護寺へ至り上人の庵室を訪ずれた。

不意に女房が這入つて來たので上人は稍怒氣を帶びて、

『汝は如何なる者かは存ぜぬが、此庵は女人禁制の場所なり、早く退がれ早く……』

あら〳〵しく叱られたる夜叉御前は更に怖ぢる色もなく、言葉優さしく

『かねて聞き侍りし尊き上人にてましますか、妾こそ小松中將維盛の室にて候か、乳の中より育て上げ良人維盛の形見とも存せし六代を過ぐる日六波羅よりの武士に捕はれ侍り、やがては鎌倉に下向して辛き憂目を見つらんと、子故に迷ふ親の暗、あはれ上人の御情けにて子息の苦患を救ひ上げ給へ……』

夜叉御前は玉なす涙にせきあへず、聲張り上げて泣き伏した。

始終の樣子を聞き了つた上人は、

『その捕手と申すは何人なるか、……北條四郎時政なるか、されど六代こそは平家の嫡流、鎌倉殿も容くは助命されまじ、ヨシ〳〵文覺一命に替へて鎌倉殿へ嘆願いたすべし、斯く言ふ中に若しや北條が首打たば最早歎いて詮なきこと、われはこれより六波羅に至り、北條に會ふて事の仔細を傳ふべし、汝は歸つて佛力の加護を祈れ……』

この上人が情けある言葉に夜叉御前は慨きの中にも力を得、上人を伏し拜み伏し拜み辭し去つた。

上人は直ぐに支度を整へて高雄を出で六波羅に北條を訪づれた。時政は慇懃に迎へ出で、一室に請じた。上人はやをら口を開き、

『さて御邊に伺ひたきは、この度鎌倉殿よりの命に由り平民の一門子々孫々を誅せらるゝと聞く、その中に三位中將維盛の息男六代ありと承りつれ、誠のことにや』

時政は四邊を見回しつゝ

『この度上洛の沙汰は、平家は一門廣かりし故子孫も定めて多かるべければ、尋ね出して失へ、腹の中まで如才なく見るべし、中にも故中將の息、中御門大納言が娘の腹に六代と云ふ童は平民の正統なり必ず尋ね出せと、鎌倉殿の嚴命なれば心の及ぶ限り尋ねたれども、行末の知れ侍らざりければ最早詮方

盡きて罷り下らんと思ひつるに計らずも大覺寺の奥菖蒲谷に住まはるゝ由を承り迎へ來つるか、類ひなく見目よし、いとほしくて未だ兎も角も致さずにあり、仲々心苦しく侍れ』

さては未だ六代は無事であるかと上人は心潛かに喜びつゝ

『さることにや、一度見侍りたし、仔細なく候や』

時政はそは容きことゝ、六代御前が押し籠めらるゝ一室を上人へ教へた。教へられたるまゝ上人は足を運び障子を引き明け給へば、六代御前は二重織物の直垂に、かねて母からの小さい黑木の念珠を手にして居たが、上人の姿を見るより恥しげに懷ろへ捻ぢ込み、パット顏を赧めた。

言ひ得ぬ美貌の中に又犯すべからざる一種の威嚴が具はつてある、上人は思

はず黒染めの紬を絞られた、六代御前も亦急に涙ぐんで來た。不言の中に情熱の血が通ふたのであろう。

上人は元の座に戻り時政に向ひ、

『如何なる先世の約束にや、六代の姿を見しよりいとほしく思ひ侍る、愚僧はこれより鎌倉へ下向して一命を申し受くべし、あへて功に誇るにあらねど愚僧これまで鎌倉殿の爲めには隨分盡し置くことなれば甚く強いて助命を乞ふべければ兎も角二十日の猶豫を賜はれたし、こは御邊の御惠みにてこそ』

時政も今更否み難く

『道理ある御言葉、然らば後日如何なる御咎めあるかは知らねど二十日の間は誓つて猶豫申すべし、心靜かに助命し給へ』

その翌日、上人は相照を伴ふて高雄を發足して日ならずして鎌倉へ下着せられた』

昔の流人頼朝も、今は總追捕使、征夷大將軍源二位頼朝卿で、四方の警固も仲々嚴重である。上人は案内を乞ふて對面の儀を願はれた、他の法師なら容易に會はれるのではないが、殊に頼朝に對しては重ねがの厚恩のある上人のことなれば、頼朝も喜んで自分の居間へ通した、上人は一と通りの挨拶をすましし、さて口を開いて、

『文覺、この度わざ〳〵罷り出でたるは餘の儀には候はず、弟子一人申し受けたきが爲めに候、他の者ならば御許しなくも弟子に致し侍れど、こは御願ひ申さずばなり難き者にて、御許しを得ん爲めに罷り出でたる次第に候。』

尋常でない上人が、わざ〳〵下向しての願ひ入れは容易ならぬ弟子なるべしと頼朝は略ぼ上人の意を察した、

『法師の弟子入りに武家に願ひ入るとは心ゆかぬことならずや。』

『さればに候、外の者ならば仔細なけれどこは御願ひ申さずては仲々叶はぬ弟子にて、斯く申すは、小松中將維盛の息、六代と申す小童にて、今度北條四郎殿には召し捕へて首打たんとせられしが、如何なる前生の因縁にや、一度見しよりあはれに思ひ侍り、何卒この法師が弟子に所望仕り度、この儀何卒御許し下さるゝやう、文覺つゝしんで願ひ奉る次第なり。』

そも〳〵平家の一門が僅か二十年を出でずして西海の鬼と化し、源平此に交代して到る所白旗翩々たらしめたるは、清盛が源氏の餘孽を殘して置いたからである、般鑑遠からず、頼朝は平族の全滅を謀つたのである、中にも六代御前は平氏の正敵、源氏にとりては容易ならぬ代物で、これがあつては頼朝も枕を高うして寢ることもならず、美酒佳肴も口に副はぬ、頼朝の顔色はやゝ變つた

『この度、北條四郎を以て平家の子孫を探し求めて失ひつるは、その六代を得んが爲めなり、こは平家の正統なればゆゝしき大事なり、その他の者ならば仔細もなければ所望にまかすべし』

頼朝は名將に似合はぬ猜疑心の強い性である、二弟義經を苦め、範頼を屠つたのもみなこの猜疑心からである、源氏の續かなかつたのもやはり頼朝の猜疑から胚胎したのである、今平家の正統を許さぬは敢へて無理であるまい。

若し六代の命を助けて君の如く遠流に處したならば、又文覺の如き謀反をす

丶むる者あらば、ゆ丶しき大事に侍れど、今は配流に處し給へとは申さず、この文覺が弟子として出家せしむる上は、か丶る御心づかひは無用にして、唯六代の命があると申すまでのことなり、その上戒行も堅固だにあらば、源家にとりても功德のこと、又君が武運も祈り侍るべし』

上人が理を盡くしてこの願ひに、頼朝は更に耳傾げず、や丶氣色ばみて

『御房の申すこと、これまで聞き入れざることはなけれど、六代を助くる事のみは聞き入れ難し、幾度乞はる丶も無用の業なり』

と、頼朝はあら〳〵しく言ひ放つた。

されどこれ位で思ひ止まるやうな上人ではない、まして出家の慣例として、他人の助命を乞ふに當りては自身の難儀を顧みぬ、こと若しその者の生命を助

け得て出家さすればよけれども若し能はざる時は身を雲水にまかし、法友知己に會はざるを以て本分とするとの、奇俠を以て仕じて居つた上人であるから、飽まで決心の色をあらはし、

『か丶る上は何とも詮なし、唯旅舘に歸り後事は弟子相照に托し置き、願ひ死に致すべし、噫、文覺の運の拙なさ御察し下され』

と、語り終ると共に上人は靜々と座を退き、頼朝は唯默してその後ろ姿を見送つた。

頼朝は上人の祈禱がどれ位まで効驗があるかと云ふこともよく信じて居る、仲々油斷のならぬ法師と、中心畏れを抱いて居つた、それが願ひ死にすると氣味惡いことを言ひ殘したは、この頼朝を威赫する心か、それとも呪咀するのか

何しても氣味よからぬ言ひ分と、上人の旅館へ人を放つて潛かに樣子を窺はしめた。

案に違はず上人は湯水さへ取らず、身を以てこの恨みを晴らすべし、專ら身を捨つる用意して、口に呪文を絶たずに念じて居ると知らして來た。

この氣味惡い報告に賴朝も詮方なく上人の請ひを容れ助命すると通じてやつたい。もう此時は上人が都を立たれてから二十日も過ぎ一と月近く經つて居つた

―西行と賴朝―

曾つて西行法師が鎌倉を過ぎた時、賴朝は之れを請じて射御と和歌の道を問ふた、西行は弓馬はうの道を繼いだが遁世の日秀廻以來の傳書を焚き、和歌の如きは僅かになすのみにて更に解せぬと固く辭したを、强いて乞はれて弓馬の道を談ずること徹宵に及んだ、賴朝は盡くこれを筆記せしめ、別ろゝに及んで銀猫を贈つたが、西行は門を出つると共に之を路傍の童子に與へ更に顧ることもなく瓢然去つたと云ふことである、その恬淡眞に敬すべしである

北條鎌倉へ下向と決す

第拾貳回

上人と六代御前

明け暮れ東の空を打ち眺め、指折り樓ふる中に關守なき月日は昨日と過ぎ今日と明け、二十日と云ふも夢のうち、今年も餘すは旬有餘日に迫つた、けれど鎌倉からは何の便りもない。

夜叉御前は上人の立たれた日から觀音經を讀誦してせめての心やりにして居るが、それでも、離恨綿として寤寐に忘れず、今は一縷の望みさへ賴み少うなり、哀別の情緒は又亂れて絲の如く、天を仰ぎ地に伏して歎いて居るさま餘所の見る目もあはれである。

北條時政も待ち疲れて今は詮方なくいよ〳〵明日は鎌倉へ下向せんと決心し、

『上人は二十日ここ申されしに、今に何の消息だに承らぬは鎌倉殿の御ゆるしなき證據なり、まこと平家の嫡流なればやす〳〵とは許し給はらじ、余が空しく都に留るもこの消息を待つ爲めなれど、今は約束の日數もすぎ、且つは都にて年を暮すべきにもあらねば明朝を期して罷り下るべければその要意致すべし』

と、武士共へ下知した。

齋藤兄弟は今更のやう驚いて急ぎ大覺寺へ駈け込み、二十日と約束せられし上人は今に見へ侍らず、約束の日數も過ぎけるに、猶都に留まるべきにあらねば北條も明朝は鎌倉へ下らんと申し侍る、噂に由ればその道にて若公を失ひ奉らん所存とか、家の郎黨も御姿見奉りては人知らず涙を催し居れり、如何にせばよろしきやと、主を思ふ二人の兄弟は袖を顔に押しあてゝ泣き伏した。

夜叉御前も涙ながらに

『上人が頼もしげに申し給ひて下向せられたる後は悲みの中にも心やりする隙のありつるに、いよ〳〵出立も曉になり、道中にて失ふ所存とやな、あゝもう恃みの綱も切れ果てしか、して六代は何としけるぞ……』

と、今に一命果たさねばならぬ覺悟が氣にかゝるのであろう、齋藤五は若公は人の見參らす時は只念珠繰り給へど、人の見參らせぬ時御袖を顔に押しあてゝ涙に咽ばせ給ふと、宿直の侍の申し侍り候と申せば、

『あれは年にも似合はぬ大人かりしか、もう所詮かなはぬ一命と健氣にも覺悟してくれしか、人知れず涙に咽ぶいぢらしさ、これ六代、よう覺悟してくれ

齋藤兄弟の決心

しぞ、そこまで思ひ切つてくれしぞ、この母はまだ思ひ切られぬ心のつらさ察してくれ、思ふてくれ』

夜叉御前は東六波羅に向いて伏し崩れたし

兄の齋藤五は弟に向ひ、

『かゝる上は何處までも若公の御供申し、若しや失ひ奉ることもあらば、御身を取り納め奉りて出家入道いたし、靈山靈地を修行し歩き花を摘み香を焚き て若君の御菩提を吊ひ奉るべし』

と云へば、弟も涙を拭ひ、さなり〳〵それもその覺悟にこそと、薄命な二人の忠僕が語り合ふを聞く夜叉御前は、思はず心の中で伏し拜んだ。

定めなき世と言ひながら、露の命ちの消ゑもせで、若きを先き立て老ひたるこの身が、六代の爲めに菩提を佛に申すとは、何と云ふ因果な親子の悲しさやらと、襟を嚙みしめ涙に亂れた。

北條六波羅を發向す

齋藤兄弟は盡きぬ恨みを殘しつゝ、涙ながらに六波羅へ歸つた。

今日は十二月十七日、八聲の鳥を待ちかねて時政は六代御前を召し連れて六波羅を發向した。齋藤兄弟は涙ながらに若公の輿の兩脇に附き添ひ、時政が勸むる馬にも乘らず、これが最後の御伴ぢやとて、跳足で附いて行つた。

母や乳母に別れ果て、住み馴れし都を雲井のよそに顧みて今日を限りの東路をはる〳〵下る心の中は何と云ふあはれであろう。屠所の羊のそれならで、一と足〳〵が死地に近づく露の命、駒を早むる武士あればわが首切るかと肝を消し、物言ひ交はす者あれば、スワ今刎ねらるゝかと、氣を揉む小さな胸の内、

何と云ふ不愍であろう。

何時か花洛も後になり、辛き憂き目に逢阪の關も超へ、故郷は山を隔てゝ陰たにさゝず、志賀の里、大津の浦を縫ひつゝ琵琶の湖左手に見つゝ旅人の知るも知らぬも粟津ヶ原、勢多の長橋打ち渡り、野路篠原を後にして鏡の驛にて日は暮れた。

未だ見も知らぬあやしげな旗亭の旅枕、何につけても悲みの涙は止め難く、終夜まどろみもせず床はうきになつた。

明くれば鏡を立つた。怪しき僧見れば上人ならんかと迷ひ、文持つ者に遇へば鎌倉よりの音信かと肝を消すも強ち無理ならぬことである。

年内に鎌倉へ入らんとて北條は馬の足を早めたが、何時しか駿河國千本の松

原へ來た。北條は先づ馬から下り、六代御前の輿を据へさして、北條は齋藤兄弟を近く召し寄せ、

『今は鎌倉も近くなり侍りぬ、各々はこれより歸り上り給へ。』

と云ふ、さてはいよ〳〵此處にて若公を失ひ奉つる所存なるかと、兄弟は胸一時に寒がり、心迷ふて頓に言も出ず、先づさし催すは熱い悲みの涙であつた。

兄はやう〳〵涙を拂ひ、

『故大殿が御出陣の時くれ〴〵の仰せを蒙りて、この三年の間は一日片時もはなれず晝夜御守り申し如何にもなり給はんを見屆け奉らんとてこれまで下りつるが、さては今を限りの御一命なるか、さても幸なき主從なるよ……。』

二人の兄弟は互ひに手を執り、顏押しあてゝヨ、とばかりに泣き伏した。

北條もさしこむ涙押し拂ひ、

『某は、平家の人々の公達を尋ね申せば時日を經ず速かに失ひ奉れとハ度〻嚴命を蒙れども、この若公の事は上人も去り難く申されければ今まで待ちたれど、何の音信のなきは、定めて御免しのなきことゝ覺ゆ、最早力ノ及ぶ所にあらず、約束致せし二十日の日數は既に過ぎ去りつるに、これまで具し申せしは若しや上人に御目にかゝらんかと思ひ侍ればなり、今一兩日もせば鎌倉へこそ入り申さん、さすれば嚴命に背きし御氣色も知り難ければ、此處にて御暇いたすべき所存なり。』

芝草の上に敷皮を敷き六代御前を輿から出して据へた。北條は言葉柔らかに六代御前に向ふて

『日頃馴れ申すにつれて恩愛の情いや增し、如何にもして御助け申し度くは侍れど、鎌倉殿の御氣色の程も見へ參らせねば、何事も一業所感と思召し、人をも世をも恨み給はず、只心靜かに念佛して、淨土の素懷を遂げ給へ。』

六代御前は何の應へもせず、涙ながらに二度ばかり點頭いたばかりであつた。やがて齋藤兄弟を近く召し寄せ、

『汝等よ、今まではよくこそ面倒見て呉れしぞ、わが身も今を限りとなれり、これまでつき下りて遂になき者に見なさんとこそ汝等の心の中も推しはかられて無殘に思ふぞ、母御前へ御文參らせ度くは存ずれど、筆の立て所も覺へねばそれも叶はず、只詞にて變りしこともなく鎌倉まで下着し、日數の經るまゝに人々の御事も戀しくこそなり侍れりと傳へよ、ゆめ千本松原にて失は

れしなど申上ぐべからず、終には知れ侍るかは知らねども、餘り歎き給ひ御身を破られざるやうに思ふなり、わが身が斯くなりぬとも汝等は急ぎ上りてよく〳〵宮仕へ申すべし、兄弟の者よ、これが六代の最後の別れぞ、身を大切に致せ……。』

慘は亂離より慘なるはなく、悲は離別より悲なるはなし、而かもこれは薄命の主從が生別なり死別なり、慘の極、悲の絶、恐らく人生窮極の悲劇であろう

齋藤五は、膝を進めて、

『君の神にも佛けにもならせ給ふた後は、吾等も命生きのびて再び都へ歸り上るべしとは存じ候はず。』

と宣ぶれば、六代御前は嚴然として

『汝等は六代が最後の言葉を守らざるか。』

と叱すると共に、頭髪の亂れが肩に打ちかゝつたを小さな美しい指尖で前へ搔き上げたを守護の武士は見て、かゝる塲になりつるに、斯くも氣も心も亂し給はぬ御心がけの程いとほしや〳〵と、互に鎧の袖を濡した。

時は十二月の二十日過ぎで日光の足は殊に早く、塒に急ぐ烏の聲物淋しく、日も早や暮れかゝつた。北條は心もいそ〳〵して

『今は猶豫もなり難し、疾く斬り奉れ。』

と、涙ながらに下知したが、數多の郎黨の中誰一人主の言葉に從ふて進み出る者がない。

時政はもどかしがり、工藤三郎親俊を斬り手に選んだ。六代御前は殊勝氣に

西に向ふて合掌し、母よりの黒木の念珠をかけて、高聲に念佛十遍あまり稱へ終り、細い首を差し伸ばした。

親俊は下知のまゝに太刀引き拔いて左の方から後ろに回り、既に斬らんとしたが、このいぢらしき姿を見て、岩木ならねば目もくらみ、心も消へ果てゝ、何處に太刀下すべしとも覺へず、前後不覺に陷り、太刀を大地に投げすてゝ

『斬り手仕ること出來申さず、餘人に仰せ付けらるべう願はしく候。』

と、時政の前に泣き崩れた。

時政もこれにはほと〳〵當惑した、誰斬れ、彼斬れ、何某仕れと下知してみたが一人として進み出る者がなかつた。

この頃のかくし念佛があらはれて

彌陀の淨土へからめとらるゝ

—(住蓮坊辭世)—

極樂へ參らんことのうれしさに

身をば佛にまかせぬるかな

—(安樂坊辭世)—

第十三回　六代御前の助命

六代御前の生命は風前の燈火よりも危く、俎上の魚、刀下の鳥に等しい。されど俎上の魚が江海に移り刀下の鳥が林藪に交はる試しはないことでもない

俄然、俄然、東の方から叫びの聲がする、北條初め居合はす武士はひとしく眸を放つた、黒染の法衣を着する一人の僧が月毛の馬を馳せ、笠でさし招き々

々叫んで居る。近づいてみれば上人の弟子相照である。相照は馬上にて聲高らかに、誤ちし給ふな、早まり給ふなと叫びつゝ、ヒラリと馬より飛び下り頸に懸けたる文袋を北條へ渡した。

披ひてみれば頼朝の自筆で

小松三位中將の息六代高雄上人頻に申請間所預給也

頼　朝

北條四郎殿へ

と書かれてある、時政は押し頂き〳〵聲も高らかに二三返讀み上げ、何より結構〳〵と又も押し頂いた。

悲みが轉じて喜びとなり、禍が變じて福となると云ふが、このやうな轉じやうは世の試めしにも少かろう。齋藤兄弟は云はずもがな、北條の郎黨まで雀躍して喜んで居る。

斯がる中に上人も急いで着き給ひ、馬を下るや、北條に向ひ

『やよ北條殿、若君は申し預りぬ、今一と足もとて免し文を先きへ參らせたれば定めて見給ひしならん、鎌倉殿の仰せには、この六代こそ平家の嫡流、且つや父の中將は我を討たんとて初度の大將軍たり、外の者ならば望みに任かすべけれど、六代のみは免し難し、この頼朝も稚きをなだめられて今はかゝる身となりつるなり、さればこそこの六代も免し置かば必ず後日の爲め惡しかるべし、上人の厚意は身にとりて忘れ難けれども、六代の命乞ひは聞き入れ難しと、動き給ふ氣色は更に見へ申さず、されど日頃文覺が心盡しの程も申し上げ命免るし給はらばやがで法師になし佛法修行せんには更に後惡しき

こと侍らず、源家の武運長久の功徳ともなり侍るべし、若し預け給ずは、この文覺は鎌倉にて飲食を絶ち思ひ死にしてこの恨みの程は怨靈となるべしと威しつ賺しつ種々に申し上げたるに、さらば六代は上人が曾つてこの頼朝を相せし如く何か見所のありて申し受け給ふにやと、問ひ給ひつる故、その儀ならば思ひも寄らず、たゞわりなく姿の不愍さに、慈悲の心にて免させ給へと、様々に申し受け奉りたり、如何にも遅くなり日數も經ちたる次第なり。』

上人が色氣ばみて語り給ふや、北條は

『上人より承りし日數も過ぎたりしかば御免しもなきことゝ思ひつゝ罷り下りつるに、よくも誤りせざりけり、今一と時も遅かりしなば本意なきことも出來候ひしに、御運強き六代君に候。』

『げに日數ものびぬれば心元なかりつるに、今日まで別のこともなかりしは、單へに御邊が御厚恩の程にこそ、ありがたし、〳〵。』

夢に夢みる心地の六代御前は

消へずとてたのむ命にあらねども
今朝までつゆの身ぞ殘りける

と、懐ひを三十字にあらはした、あはれに又いとほしく聞へ、上人初め居合す者思はず涙ぐんだ。

力なき冬の太陽は西に傾き、餘光は小波に映つて黄金色の渦紋が何となく物淋しい。

北條は上人に向ひ、今暫く御供すべきなれど、年内に鎌倉殿へ披露すべき大

切の用向もあるべければこれにて御暇仕るべしとて、慇懃に挨拶し、六代にも名殘りを惜む旨申し述べ此に一行は東西に袖を分ち、六代御前は上人に伴はれて同じ道に引き返した。

道も姿も變らねど、六代御前は俎上の魚が江海に移りし如く、どんなに嬉しかつたであらう。

今年も何時しか暮れ果てゝ、上人の一行は尾張の熱田で嬉しい新年を迎へ、正月五日に春の都へ着かれた。

先づ二條猪熊なる上人の里坊に着き、疲れの體も厭はず夜遲く大覺寺へ母を訪づれた。

一時も早く無事で助かりし姿をも見せ、歎き入り給ふ母御前を慰めたいと思

ふたは空ら想ひで、門を叩いても何の應へがない、主を知つた飼犬が垣根の隙から出て匂ひ上るのみである。

二人の忠僕は案内知つたるまゝ門を開いて主を入れたが、家の中には人影さへなく、寂りとしてある、命惜しく思ひつるも、今一と度母御前を見奉らんと願ひしのみ、今は生きのびても何の甲斐やあらんと、六代御前は泣き伏した。

焦れの一夜が明けて、近隣で樣子尋ねてみれば、若君の立ち給ひし後は御歎きの餘り、淵川へも身を沈めんと、母御前は悶へ給ひしが、若しも歸り給ふこともやあらんと、甲斐なき命を生きて、上人の報告をも聞かんものと、この程より大佛へ參り給ひ、それからは長谷寺に百日の參籠せられ給ふ由承りつれ新年は奈良にて迎へさせられ、今は長谷寺なるべしとのことで、やゝ胸なで下

した。

齋藤五は翌朝急いで奈良へ出掛け、六代御前は上人に伴はれて高雄へ入つた

奈良にある、夜叉御前や、乳母は齋藤五の知らせに夢の心地して急いで大覺寺へ歸つてみれば、六代御前も高雄から下り來り、嬉しい時にも、悲しい時にも先立つものは涙で、母も乳母も六代御前の無事な姿を見るや、右と左に抱きかゝへ、嬉し涙に咽び果て暫し言葉も出なかつた。

この後、六代御前は常に高雄に住みけるが十四五にも及べば、その姿はいやが上に美しく、昔の光源氏もかくやと思はれたが、未だ頭髪を下ろさぬ。

夜叉御前は、この姿を見る度に、世が世ならば今は近衛づかさにてあらんものをと、恨み泣きしたのも强ち親心ばかりではなかつた、鎌倉からは流石に氣

にかゝると見へ、便宜のあるにまかせて、預け奉りし小松中將の息六代は如何に候はん、昔し頼朝を相し給ひしやうに、怨敵を平げ、父祖の恥を雪がんとする程の者なるや、委しく相し給へと、上人へ向けて尋ねて來るが常であつたその度に上人はこは、一個不覺の者にこそ、煩ひ給ふ程の者に侍らず、御心やすく思召し給へと、申し送つた。

けれど疑ひ深き頼朝は仲々心安んじては居らぬ、密かに人を高雄へ放つて六代御前の人と爲りを窺はしめたは二度や三度ではなかつた、斯かる風聞を耳にした夜叉御前は早く飾りを落すやうにと促した。

恰度文治五年の春であつた、六代御前はさしも美しい髪を下ろして墨染の法衣を着るやうになつた、年は十六の兒盛りであつた。

六代御前の出家

二人の忠僕も同じく出家の身分になり、主從三人は修行に出かけんものと、先づ高野へ上りて瀧口入道に遇ふて、父維盛が出家のさま、臨終の模樣など委しく尋ねた。

三位中將維盛は、元暦元年三月二十八日、僅か二十七歳を一期として

生れては遂に死ぬてふことのみぞ
定めなき世の定めなりける

の辭世を遺して、浪荒き南海に身を沈めた人である。

六代御前は、父の入水せられしと聞く島を見て、感慨の情堪へ難く、沖より寄する白浪に、わが父上は何處に沈み給ひしかと問はまほしく、濱の眞砂を見るにつけ、父の御骨にやあらんとそゝろ懷かしく、海士の衣にあらねども涙の

六代御前斬罪に處せらる

袖に乾く間もなし、げにあはれなことである。

主從はこゝに一夜を通夜して誦經念佛し、翌日濱の眞砂に六字を書き、父の菩提を懇ろに吊ふて歸つた。

この後六代御前は、三位禪師と名乘つて、高雄の奥に行ひすましてあつたが鎌倉からは猶も目星をつけ、平氏の嫡統なり、たとひ頭を剃るも、よもや心を剃るまじと、召し捕りてあはれ三十歳を最後として、相撲國越川の畔で斬罪に處した、佛けの說き給ふ因緣は免れ難いものである。

第拾四回　上人の入寂

總べて英雄や豪傑は一旦風雲に乘ずれば天に冲するが如き勢ひにて非常の曠

英雄と時人

業を胎すものであるが、然らざれば轉じて時人に疎んぜられ、嫌惡せらるゝが常である

豪僧文覺上人も頼朝の世にある間は重く用ゐられ給ひ、高雄の奥で心靜かに行じて居られたが、恰當建久十年正月十三日に、源頼朝は五十三歳を一期として歿した。

頼朝の薨去

人生の榮枯は恰も秋天の如く、昨日肩摩轂擊の地も今日は忽ち寂寥として雀羅を張るに至る、頼朝の歿後、上人は不臣を謀るとの名の下に草庵は捕手に圍まれ、理不盡に高手小手にいましめて禁獄へ投じた。

公卿僉議の結果、いよ〳〵隱岐國へ流罪と決まつた、この時上人は八十の高齡であつた、上人が都を出給ふに際し、

上人又流さる

『是程老いの浪に立ちて、今日明日をも知らぬ身をたとひ敕勘なればとて、都のほとりにも置がずして、はる〴〵隱岐まで流すとは、悲しきわざなり、恨めしきことなり』

心頭に徹したる悲憤の叫號は上人の胸を衝いて出た。

彼の地へ着かれてからも、毎に恨みの叫びを繰り返し、あはれ再び都の空をと望みし甲斐もなく、浪荒き北海に、春の雁の越路に傳ひ、秋の燕の故郷に歸るを餘所に恨み、夜は渚の千鳥と泣き明し、晝は磯邊の浪小袖をぬらし、落魄の老後を慨きつゝ入寂せられた。

上人の入寂

人生もとこれ草頭の露、紅顏誰れか保ち得ん愛別怨憎の業報人毎に定まる、豈啻に上人一人に限らんや』

顧ふに、鎌倉時代は日本佛教界の精粹にして、法然上人、親鸞上人、榮西道元の兩禪師等の前後に輩出せられたは、當時叡山高野を始めとして、諸寺諸山の僧侶は墮落の極點に達し、自行化他の本業を忘れ弊害百出した結果であろう、中にも袈裟御前の孝貞によりて産れたる豪僧文覺上人の如きは、當時政治宗教の腐敗を慨くこと甚しく、佛法の利刃を縱横に揮擊し意氣天に冲し、千載の下懦夫を立たしむの慨があつた高僧で、大法の爲めには粉骨碎心あらゆる苦行精進を厭はず、その精力の卓絶せる其氣力の盛んなることは殆んど稀れに見る處の偉僧であつたのである、たゞ其性行のやゝ剛放に過ぎて世の容るゝ處とならず、波瀾曲折甚だ光彩ある生涯を以て、落魄不遇の間だに歿せられたのは痛ましきことである、乍然天才は多く異常の生涯を以て了るのが常である、此意味に於て上人の落魄はやがて上人の生命であつたのである、其處に偉人の潜みたる眞價がある、其處に大なる力がある。

文覺上人（畢）

大正三年五月五日印刷
大正三年五月十日發行

正價金貳拾五錢

著作者　大富秀賢

發行者　西村九郎右衛門
京都市下珠數屋町東洞院西入橋町八番戸

印刷者　中川玄士
京都市醒ヶ井木津屋橋下ル

不許複製
文覺上人

發行所　京都市下珠數屋町　西村護法舘
振替口座東京四五九七

終